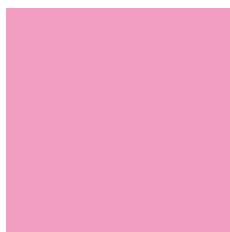
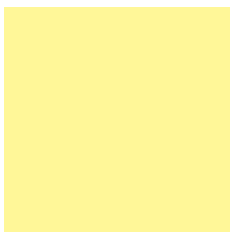
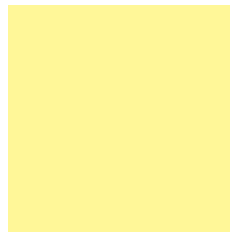


保 育 子 育 て 研 究 所 年 報

2009年度

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所

- 第7号 -



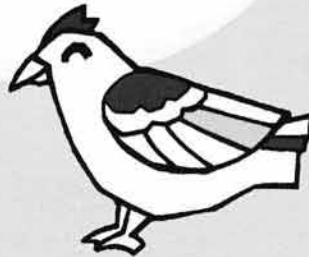
目 次

はじめに	【石黒宣俊】	3
	【大谷 岳】	3
<hr/>		
2009年度 第7回夏季保育研究セミナーの報告		4
「今、子どもたちは－子どもの貧困－」	【浅井春夫】	11
「今、子どもたちは」 －子どもの貧困 今、私たちにできること－を聴いて	【高柳鈴子】	20
「浅井春夫氏の講演を聞いて」	【原田明美】	22
<hr/>		
「7年目を迎えた子育て交流会 －今までの振り返りと今後の方向性－」		
	【荒川良子 基村昌代 宍戸洋子 高須裕美】	24
資料 2009年度子育て交流会の経過・参加人数・内容		30
<hr/>		
研究報告		
「サンタクロースってほんとにいるの？」	【田中義和】	35
「子どもたちは造形で何を表現するのか」	【高田吉朗】	42
「地域の社会資源を活用した子育て支援の実践的試み」	【吉見昌弘】	48
<hr/>		
実践記録		
「小規模園の良さを生かして－障がい児も共に－」	【杉野葉子】	56
「鬼遊び（氷鬼）の実践記録」	【犬飼敏江】	61
<hr/>		
資料		
2009年度 事業報告		68

保育子育て研究所は、子育て中のみなさん、保育者のみなさんを応援します。

- ✿ 子育てに悩んだとき
- ✿ 子育ての情報交換がしたいとき
- ✿ 保育の仕事に迷いがでてきたとき
- ✿ 保育実践の質を高めたいとき
- ✿ そのほかどんなささいなことでも

気軽にお越しください。
大学教員・研究所スタッフがいつでもお答えします。



名古屋短期大学・桜花学園大学
保育子育て研究所



はじめに

桜花学園大学
学長 石黒 宣俊

名古屋短期大学
学長 大谷 岳

昨今、保育所の在り方、保育士養成制度の改変などをめぐって論議が活発に展開されている。これらの問題は焦眉(しょうび)の問題であり、早急な解決が求められるが、抜本的な解決につながるのか、従前と同じように単なる一時しのぎの策に終わるのか、現時点では予断を許さない状態にある。これに比して名古屋キャンパスでは2002年10月に保育子育て研究所を設立し、高い見識と地道な努力を重ね、現職保育者への支援、子育て中の父母に対する支援、それに関する調査・研究活動に従事する一方、翌年には『保育子育て研究所年報』を発刊し、その成果を公表した。今季は七期目に当たる。

本来、教育は人間の一生を左右する重要な課題であるにもかかわらず、義務教育以前の子育てに関しては等閑視する傾向が強かったように思われる。中国六朝時代の顔之推はその『顔氏家訓』で次の如く言う。「少なくとも三、四歳になって、ほぼ大人の表情が判るようになり、その喜怒の感情が識別できる頃になったら、すぐ躰(しつけ)をはじめて、行(や)らせること行らせ、止めさせることは止めさせるという風にすべきであろう。」と。

私は、この研究所が子育て、教育に関する中心的課題を担い実践的に行動することによって地域社会に貢献し、年報によってその成果を確認し、新たな飛躍に結びつけてほしいと念願してやまない。

2003年度から始まった保育子育て研究所の活動も今年で7年目を終えました。経済的不安、地域の治安への不安など、子どもを生み、育てる環境も年々厳しさを増してきています。この不安の多い少子高齢化社会においてますます必要になっている子育て支援。本学における保育子育て研究所の活動はその重要性をいっそう高めているといえます。保育子育て研究所は①保育者として働いている人たちの支援 ②子育て中の父母への支援 ③保育、子育てに関する調査・研究活動 の三つを主な活動内容の柱として始まりました。②の活動として行われている「子育て交流会」も年々充実し今年度も57回実施され、この地域になくってはならない存在になってきたと思います。保育子育て研究所の当初の設置の意味でもあった、実践と研究と大学教育の結合で開かれる新しい可能性が徐々に開かれていると感じています。

桜花学園高等学校にも保育コースが設置され、保育者になりたいと願う多くの中学生が桜花学園高校に入学しています。そして名古屋短期大学保育科、桜花学園大学保育学部は中部地区、全国でもトップレベルの保育者養成校としての期待がよせられています。このような期待に応えるためにも、保育子育て研究所を中心として行われる実践と研究と大学教育の結合が今後の桜花学園の発展に大いに関わってくると期待しています。

2009年度 第7回夏季保育研究セミナーの報告

本学卒業生を中心とした若手保育者セミナーとして、下記のプログラムに沿って夏季保育研究セミナーが7月26日に名古屋キャンパスで開催されました。

日 時：2009年7月26日（日） 10:00～16:30
場 所：名古屋短期大学・桜花学園大学（名古屋キャンパス）
主 催：保育子育て研究所
対 象 者：保育者（卒業生以外の参加も可）
参加者人数：169名（名短118名 桜花48名 他3名）

<午前のプログラム>

10:00～

開会式

- オープニング 野津 牧
基村昌代・石山英明ゼミ2年
高田吉朗
- あいさつ 高田吉朗
近藤正春

10:30～ パネルディスカッション

テーマ「私の経験談・後輩へのメッセージ」

<パネラー>

- 荒川良子（経験35年 元豊明市公立保育園）
- 亀井真実子（経験16年 名古屋厚生会館第二保育園）
- 坂井いのり（経験3年 桜花学園大学3年次編入）
- 杉田みち代（経験2年 一宮市立貴船保育園）

<司会>

宍戸洋子（研究所長）

○諸連絡・閉会

12:30～13:10 昼食・休憩

<午後プログラム>

○1限 13:10～14:10

- A 実践屋台村+手遊び村 場所：食堂
浅野・高田・田端・水谷・中川
- B 井戸端会議（0・1歳児） 場所：721教室
木村・村松+卒業生
- C 井戸端会議（2歳児） 場所：722教室
豊田・吉見・石山+卒業生
- D 井戸端会議（3歳児） 場所：723教室
大村・河内+卒業生
- E 井戸端会議（4・5歳児） 場所：724教室
宍戸・藤田+卒業生
- F 井戸端会議（障がい児） 場所：725教室
今野・嶋守+卒業生

○2限 14:50～16:20

- G 実践屋台村+手遊び村 場所：食堂
浅野・高田・田端・水谷・中川
- H 井戸端会議（0・1歳児） 場所：721教室
高柳・平野・森本+卒業生
- I 井戸端会議（2歳児） 場所：722教室
橋本・小嶋+卒業生
- J 井戸端会議（3歳児） 場所：723教室
牧・近藤茂+卒業生
- K 井戸端会議（4・5歳児） 場所：724教室
左口・古畑・鏡+卒業生
- L 井戸端会議（児童福祉施設） 場所：725教室
野津+卒業生

夏季保育研究セミナーの記録（要約） 午前中のプログラムのみ

<午前のプログラム>

10:00～

開会式

○オープニング

・野津先生、基村・石山ゼミ2年（桜花）、高田先生らが、壇上でそれぞれ楽器や歌、踊りを披露する。参加者も一緒に歌うことで会場が盛り上がっていく。

○ごあいさつ

・高田先生（名短）

学科長より挨拶。名短保育科や専攻科の変化と充実についての話をする。

・近藤先生（桜花）

学部長より挨拶。保育会全体のはじめの一步という中で、卒業生もその中にご活躍されている。子ども達の明日へつながるように保育会を盛り上げていくことを期待している。

10:30～ パネルディスカッション

テーマ「私の経験談・後輩へのメッセージ」

宍戸研究所長より挨拶

・みなさんお帰りなさい！「帰っておいで、元気を出そうよ」を主旨とした7年目の企画です。

ここで少し元気をもらって。午後の井戸端会議でいろいろとおしゃべりをして下さい。

・午後は、食堂で実践屋台村と手遊び村を実施して、明日の実践に少しでも役立てて欲しい。

・日本の保育を引っ張っていく保育子育て研究所の内容にしたい。

・自己紹介をしながら順番に自分の失敗談を語ってもらう。

・ぶつかった保育の悩み、職員関係を4人に前半は語ってもらう。後半はそれでも保育は楽しいということを語って欲しい。

<パネラー>

荒川良子（経験35年 元豊明市公立保育園）

亀井真実子（経験16年 名古屋厚生会館第二保育園）

坂井いのり（経験3年 桜花学園大学3年次編入）

杉田みち代（経験2年 一宮市立貴船保育園）

○杉田みち代（経験2年 一宮市立貴船保育園）

・保育経験が2年で最初は、何も分からないまま失敗する。

・毎日子どもに振り回されるばかり。2歳児にイヤイヤ言われて、こっちがいやだよと思う時

もあった。

- ・0歳児では、なかなか他の先生に自分の意見が言えなかった。複数担任の難しさ。自分の意志が上手く伝えられない。以前、懇談会で先生は私の子どもを見てもらっていますか？と聞かれてショック。
- ・最近少しずつ余裕ができてきた。子どもに少し寄り添えるようになった。

○坂井いのり（経験3年 桜花学園大学3年次編入）

- ・卒業後、3年間、日本の保育を経験した。
- ・その後、アメリカで2年間チャイルドシッター（チャイルドケア）の経験をした。その後桜花学園に3年次編入して学んでいる。

（日本の保育では）

- ・最初は、2週間の研修で厳しさを学んだ。本当にこれでやっていけるのかな。と不安に思いつつ契約をしていった。
- ・他の先生に助けられてばかりであった。
- ・2年目に一人で懇談会を担当したが、保護者の信頼がなかなか得られなかった。

（アメリカでは）

- ・最初は、なかなか子ども達の信頼を得ることができなかった。
- ・日本とアメリカでは保育の考え方が異なる。日本は子どもの目線で寄り添うがアメリカは、タテの関係が強い。誰がボスカを子どもに理解させないとダメと指摘される。それでもボスになれなかった。
- ・いろいろと経験させていただいた。

○亀井真実子（経験16年 名古屋厚生会館第二保育園）

- ・保育経験が16年で名古屋方面で仕事をしており、久しぶりに名短に来た。何を話そうかと考えながら来た。
- ・就職活動の時、当時は幼稚園に就職したかったが全部落ちてしまった。
- ・当時は、楽器を教えるとか教育的なものに関心があった。それで専攻科に進んだ。その時、いかに3歳までに与える子どもの影響はどれだけすごいものか分かるようになった。
- ・その後、縁があって現在の保育園に就職することになった。
- ・いまだに日々悩んでいる。
- ・1年目は右も左も分からない状態だった。一緒に担任をしている先輩と同じ事を言ったり、させたりしたけど、子ども達は自分の言うことをしてくれない。
- ・その時は子どもをいかに言うことを聞かせるかに労力を使っていた。
- ・先輩に「それほど大きな声を出さなくても、子どもは聞いてくれるよ」と言われてショック。
- ・当時は早く年を取って早く先輩になりたいと思っていた（今はそう思わないが）。

○荒川良子（経験35年 元豊明市公立保育園）

- ・35年間豊明市の保育園を勤めて昨年退職した。

- ・昔の頃の保育の思い出を話そうとすると難しい。
- ・皆さんへ何かアドバイスをしようと思い家の中から勤務して1年目、2年目の保育ダイアリーを持ってきた。
- ・昭和48年に豊明市で採用された。
- ・クラスの子ども達が席についてくれずに、出て行ってしまう子どももいた。
- ・年長さん31人の子ども達を席に着かせることに悩んでいた。
- ・今ではとても許されないことかもしれないが、叱った子どもを倉庫に入れたこともあった。
- ・その時、主任の先生に「怒ってもいいけど、倉庫に入れなくてね」と指摘されて反省したこともあった。
- ・クラスの子どもの弟が公園で行方不明になったときがあった。後で思い起こすと、自分一人で解決しようと思わずに、誰かに相談すればもっと良い解決方法があると思った。
- ・保育経験1年目は大変かと思うけど、誰かに相談することが大切。
- ・先輩のマネをしよう。分からないことは聞こう。ということをや心がけるようになった。

<司会>

宍戸洋子（研究所長）

- ・ご発表ありがとうございます。2回目にお聞きしたいことは、その中で学んだこと。後輩に伝えたいことをお話してもらいます。

○杉田

- ・泣いてばかりいる子がいたが、何度か語りかけて一緒に遊ぶと少し心を開いてくれてうれしかった。
- ・年長さんで逆上がりできない子がいた。何度も私が誘うと少しずつ鉄棒にふれるようになる。励まし続けていき2ヶ月くらいすると、びっくりするくらいできるようになった。
- ・周囲の子ども達も喜んでくれて本当に感動したことがある。
- ・ほとんど意思表示をしない子どもがいた。しかし劇などで少しずつお話できるようになった。今は小学生になったが、今でも学校であったことをうれしそうに報告してくれる。成長の姿がみられてうれしい。
- ・日々追われることも多いが、子どもの成長する姿などを大切にしています。

○坂井

- ・優柔不断なことも多いが、考え込むと進めない。とりあえず一歩出すことを心がけている。
- ・アメリカでの経験で、できないと思っていたことができるようになった。英語が苦手でも他にできることで補えるのではと思った。
- ・そうした経験から限界を決めないようにしている。

- ・アメリカで「ぐるぐるじゃんけん」を近所の子ども達に広めていったこともある。
- ・アメリカでは自分の子どもをすごくほめる。他人の前で子どもをほめるので子ども自身に自信がもてるようになる。
- ・日本の良さもある。ボスになることよりも子どもの目線になることが自分には大切と思った。
- ・アメリカでは安全よりも宗教上の決まりを守ることが大切。
- ・ブラジルでは、事故を起こしても人身でなければあまり騒がない。
- ・日本では子どもに手を挙げないのが普通。イギリスでは、手を挙げるのが普通という考えもある。
- ・自分のスキルを生かして外国のことをよく理解した保育を実践したい。
- ・目の前にあるものがすべてではない。いろいろなことに挑戦して自分の視野を広げていって欲しい。

○亀井

- ・勤めている民間の保育園では、いろいろな年齢でいろいろな経験をされた人がいる。
- ・どの先生も子どものためを考えて保育をしていると思う。
- ・自分が続けてこれたのは、同じ職場の同期の先生でいろいろなことを話すことのできた友達がいたことだと思う。
- ・本当に職場の悩みを相談できるのは、同じ職場の人だと思う。
- ・もう一つは、自分の母親ぐらいの年齢の先生との出会いです。当時、少し保育を理解して生意気に意見を言うようになったが、その一言一言をすごく受け止めてくれた。
- ・その先生になら素直に話せるが、それがすごく助かっている。
- ・自分の悩みを打ち明けることのできる人が一人でも二人でもいることが大切。
- ・そしてもう一つは、辛いときに名短時代の実習ノートを見るとびっしり書いてあり、原点に戻った気持ちになって頑張ることができる。

○荒川

- ・いろいろな生の舞台を観ることが好きです。
- ・それを観ることで保育でのヒントになることが多い。
- ・手遊びなどいろいろな保育技術の勉強をすることも大事ですが、社会に出て、いろいろなことを見ることも勉強になります。
- ・35年間で何が役に立ったかというところ「ご縁（円）」かと思う。
- ・自分がしたことがいつか返ってくるかなと思う。
- ・自分が受け持った子どもが保育園の先生になって一緒に仕事をしたり、お母さんになって子どもが自分の保育園に来たりすることもあります。
- ・皆さんも今は辛いかもしれないけど、年数が経てばだんだん自信がついてきます。
- ・苦手なことに挑戦する。嫌いなことから逃げないこと。若いからできることかなと思います。

<会場からの意見>

○保育経験40年の高柳先生より

- ・大きな失敗をしたことを思い出しました。当時、保育をして3年目のころ子どもが逃げてしまったこともある。
- ・その頃は保育者はえらいという印象があった。
- ・だんだんとスケールの大きい失敗をするようになった。
- ・ある男の子を叱ったところ、おやつの時間にいなくなった。2つ席がなかった。
- ・さっき二人で門を出て行った。園長不在、主任不在で、困ったなと思った。
- ・そのお母さんが二人を連れて戻ってきた。大騒動になるところだった。
- ・みんなに救われて今の私があると思う。
- ・若い時にしか失敗できないものもある。失敗しながら成長し頑張りたい。

○保育経験38年の木村先生より

- ・私も数々の失敗をしてきた。
- ・最初は休んではいけないと思っていたが、どうしても辛い時は、仮病で休んだこともあった。
- ・今では園全体でみるようになったが、当時は、自分のクラスは自分で面倒をみるのが当然で、何かトラブルがあると担任の責任になっていました。
- ・今は辛いことがあっても、30年過ぎると良い思い出になることもあるので皆さん頑張って下さい。

○ 宍戸研究所長

- ・皆さんが話したいこともたくさん出てきたと思うので、それは午後のプログラム井戸端会議で話し合ってください。
- ・みんなで語り合って元気をもらってください。
- ・パネラーへの拍手とお礼を伝える。
- ・最後に宍戸先生からの手遊び歌（こぶた、たぬき、きつね、ネコ）で終了する。
- ・最後に全員で拍手の中、終了する。

○ 諸連絡

今、子どもたちは - 子どもの貧困 -

講師 立教大学 浅井春夫

<プロフィール>

東京の児童養護施設で児童指導員として12年間勤務。現在、立教大学コミュニティ福祉学部教授。
主な編著書『子どもの貧困』『福祉・保育現場の貧困』（明石書店）『子ども虐待の福祉学』（小学館）
『子どもを大切に作る国・しない国』（新日本出版社）

開催日時：2010年2月27日（土） 午後1時半～4時

会場：名古屋キャンパス 524 教室

参加費：無料

参加状況：一般100名 学生26名 本学教職員18名 合計 144名

<配布ポスター>

講演会
「今、子どもたちは」
～子どもの貧困 今、私たちができること～

いっしょに考えましょう

今、子どもの様子が気になりませんか？ 顔が曇っていませんか？
子どもたちの顔がキラキラと輝き、未来に向かっていきいきと歩み続けてほしいと願い、
『子どもの貧困』の編著者、浅井春夫氏を招き、講演会を開催します。
ぜひ、誘い合わせておいてください。

講師 浅井春夫氏
プロフィール
東京の児童養護施設で児童指導員として12年間勤務。現在、立教大学コミュニティ福祉学部教授。
主な編著書『子どもの貧困』『福祉・保育現場の貧困』（明石書店）
『子ども虐待の福祉学』（小学館）
『子どもを大切に作る国・しない国』（新日本出版社）

日時 2月27日（土）
午後1時半～4時

会場 名古屋短期大学・桜花学園大学
名古屋キャンパス524教室
豊明市栄町底43 TEL0562-97-1806

参加費 無料
定員 200名
申込方法 2010年2月20日（土）までに、氏名・電話番号を明記してファックスかメールで以下のあて先にお送りください。
FAX 0562-98-1162 E-mail: hoiku-ken@nagoyacollege.ac.jp
（メールは、携帯電話からでもOKです）
申し込みなしの日日受渡しも可です。
※申し込みで頂いた個人情報、本学職員の個人情報保護方針に基づき、安全かつ厳密に管理致します。
後援 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会 豊明市教育委員会
主催 名古屋短期大学・桜花学園大学 保育子育て研究所

※長時間に及ぶ講演会のため、講演の内容は次頁以降の当日配布された資料（一部省略）からご推察下さい。

講演会

今、子どもたちは

——子どもの貧困 今、私たちにできること——

浅井春夫（立教大学）

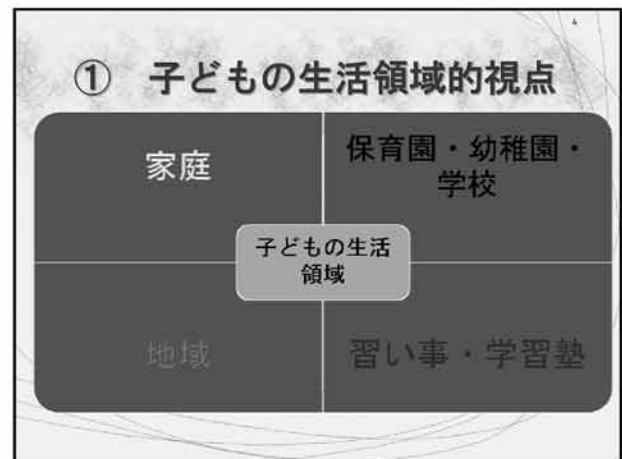
乳幼児期の子どもたちのいま

どんな出来事が身近に起こっているか

- 保育園での子どもの声—ママに電話しないで！
- むし歯の治療がされていない子ども
- がつつと給食を食べる子ども
- 児童虐待と虐待死の増加
- 保育所・認可外保育施設での子どもの死亡事故
- “モンスターペアレント”からのクレーム
- 保育現場の正規・非正規の割合がほぼ同数に

子どもが見えるために

- ①生活領域的視点——それぞれの領域での自己実現
- ②生活構造的視点——ピラミッド型からT型生活構造への変遷
基礎的生活(衣食住など)、あそび、手伝い・しごと(労働)、学習
- ③生活史的視点
※事例紹介



③子どもの生活史的視点

- 子どもにも過去・現在・未来がある
- 子どもには子どもの想いがある
- 子どもには子どもの世界がある
- 子どもには子どもの論理がある
- 子どもの現実と人格はトラウマ理論だけで説明できるのではなく、経験と学びの集積のなかで形成される
- 生活史的視点は子どもへの視線の変革へとつながる



ヨコッタさがしの コミュニケーションの3原則

- 第1の原則は、事実在即して具体的にほめ、評価すること
- 第2は、タイミングよく声かけができること
- 第3に、心を込めて表情とことばをマッチさせて、ヨコッタさがしをすること

政策とは何か

- 政策課題とは何か
事実・現実・真実をどう見るのか
- いま何を変えなければならないか
何に痛みを感じ、許せない現実とは
- 政策とは希望の組織化
ある特定の問題や問題群を解決するために決定された行動の指針
「政策目標」と「政策手法」
政策づくりは現状分析・目標・プロセス・具体化・総括という総合的なとり組み

「能動的な社会政策」

- 子どもと家族を対象にした「能動的な社会政策」の骨格とは、第1に子どもへの財政投入を積極的に行うことであり、第2に子どもを養育する親、とくに母親の雇用条件の拡大をすすめること、第3として親の負担を少なくし、しごとと子育ての両立支援を具体化することがあげられており、第4として出産と子育てに関する費用を社会的な責任として政策化していくことが強調されている(OECD編著、井原辰雄訳『世界の社会政策—能動的な社会政策による機会の拡大に向けて—』明石書店、2005年、88頁)

いま、なぜ子どもの貧困なのか

- 1995年以降の子どもの貧困の急増と深刻化
- 子どもの貧困が子どもの人生にとって、どのような意味を持っているのかについての社会的注目
- 反貧困の運動の高揚のなかで、落ちこぼされてきた子どもの貧困への注目
- 新自由主義政策の黄昏と社会的批判があらわに
構造改革と自己責任の論理の問題点が鮮明に
- 子どもに対する社会保障の貧困への批判
- 子どもの貧困への対応現場の職員の研究運動

子どもにとって 貧困の現実とはいったい何か

- 無関心でいられること
- 希望と可能性を見いだしきれないこと
- 重要なライフステージでチャレンジが保障されないこと
- あきらめを体得していること—この家族・保護者だからしょうがない—
- 最後の最後で守ってくれる人がいないこと

子どもの貧困と格差を捉える視点

- 1) 人生のスタートラインでのチャンスの不平等のあらわれとして
- 2) 子ども期の生活や教育保障への権利侵害の問題として
- 3) 人生はじめの時期に、希望・意欲・やる気までもが奪われている現実として

13

子どもの貧困問題を把握する方法

- 1) 所得水準による把握の方法—その国の勤労者の所得分布の中央値の50%以下の所得しかない家族のもとで暮らす子どもの割合
- 2) 相対的剥夺指標（必要な生活資源・基盤が不足していることで、健康と発達と文化が生活のなかで保障されていない状態の指標
- 3) 子どもの希望・意欲・やる気まで奪われている現実とライフサイクルのなかの意味

14

子どもの貧困率の国際比較 (2000年)

国名	子どもの貧困率	90年代中ごろからの子どもの貧困率の変化	全人口の貧困率
メキシコ	28.4%	-1.2%	20.3%
アメリカ	21.7%	-0.6%	17.1%
イギリス	16.2%	-1.2%	11.4%
日本	14.3%	2.3%	15.3%
ドイツ	12.8%	2.4%	9.8%
フランス	7.3%	0.2%	7.0%
スウェーデン	3.6%	1.1%	5.3%
デンマーク	2.4%	0.6%	4.3%
OECD25か国平均	12.1%	0.7%	10.2%

15

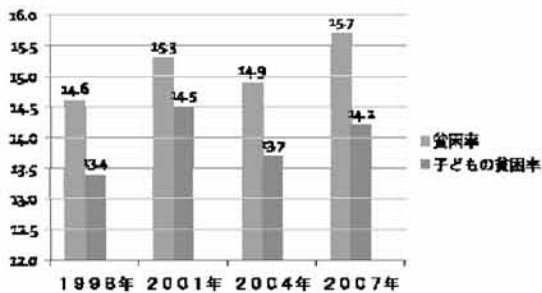
主要諸国の貧困率 —再分配前と再分配後—(単位:%) OECD編『Growing Unequal?』2008

	1985年		2005年	
	再分配前	再分配後	再分配前	再分配後
日本	12.5	12.0	26.9	14.9
アメリカ	25.6	17.9	26.3	17.1
フランス	35.8	8.3	30.7	7.1
ドイツ	26.9	6.3	33.6	11.0
イギリス	—	—	26.3	8.3
スウェーデン	26.1	3.3	26.7	8.3
ノルウェー	18.7	6.4	24.0	6.8
デンマーク	20.1	6.0	23.6	5.3

16

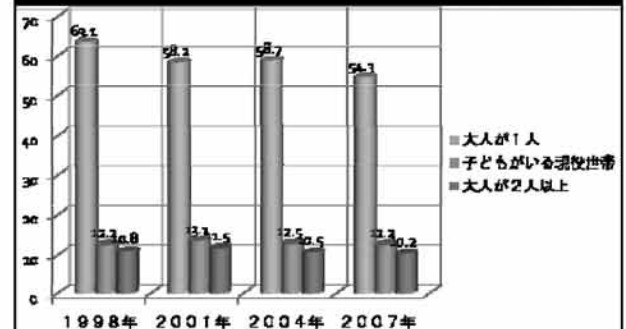
相対的貧困率の年次推移

(厚生労働省、2008年10月20日発表)



17

子どもがいる現役世帯の世帯員の相対的貧困率



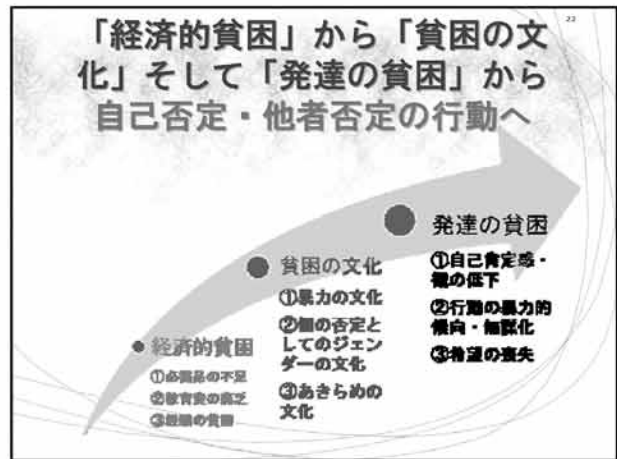
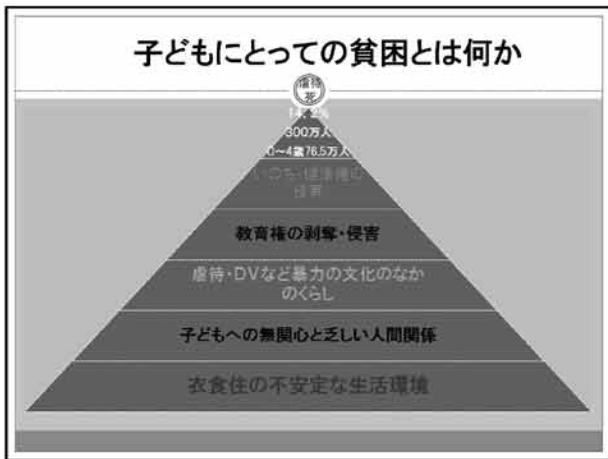
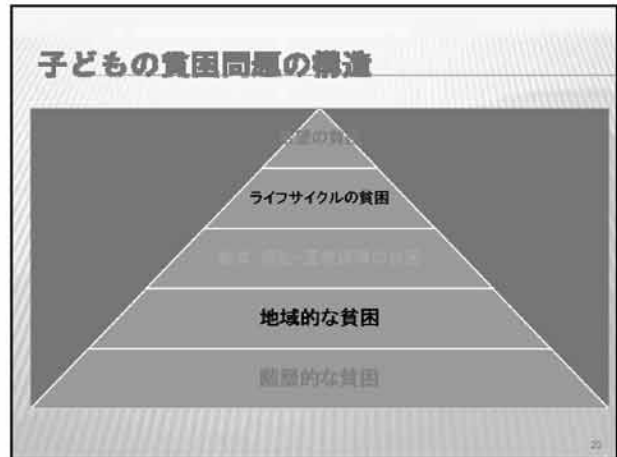
18

種類別世帯の平均所得と構成割合

厚生労働省「2008年国民生活基礎調査」

	総所得	稼働所得	公的年金	財産所得	社会保障	その他
全世帯 金額	566.2	430.9	94.6	13.7	4.0	13.1
金額 %	100.0	77.5	17.0	2.5	0.7	2.3
児童の いる世帯	691.4	639.9	31.6	8.6	5.5	6.5
金額 %	100.0	92.5	4.6	1.2	0.8	0.9
母子世帯	236.7	185.8	10.9	1.1	2.7	11.2
金額 %	100.0	78.5	4.6	0.5	11.7	4.7

母子世帯 統計は、2007年調査



- ### 子どもの貧困の現われ方
- 一見ようという努力が問われているー
- 国保無保険の家庭の子どもの実態と声
保健室でのやりとり
虫歯の治療ーいのち・健康権の格差
 - 中学生で総入れ歯！？
 - 教材費に苦勞をしている子どもの現実
 - 給食費未納の家庭の子どもの姿
 - 卒業アルバム代が払えず、持たないまま卒業する高校生
 - オプラートを朝食にする定時制高校生
 - 高校・大学中退問題
 - 定時制高校の統廃合で強いらられる困難
など多くの生身の子どもたちの実態が見えてるようになってきた。

- ### 貧困が虐待の構造的背景
- 「児童虐待相談のケース分析等に関する調査」から
- 1) 虐待者の就労状況
正規就労 29.6%
 - 2) 虐待につながる要因
経済的な困難、虐待者の心身の状況
ひとり親家庭、夫婦間不和、不安定な就労
 - 3) 虐待者と世帯の経済状況
課税世帯は3分の1にすぎない

■生活保護受給世帯の学歴状況

世帯の状況	総世帯数	調査世帯数	生活保護受給率(%)	低学歴率(%)	中等学(%)	高校卒業(%)	専業主婦(%)	平均年収(円)
高齢	1,625	91	30.1	70.1	73.6	5.5	28,517	
親子	691	106	32.7	66.0	39.7	27.4	74,475	
障害	585	40	44.1	72.5	65.0	7.5	26,754	
養育	859	100	29.1	76.0	64.0	12.0	81,230	
その他	224	53	31.1	67.9	54.7	13.2	74,831	
合計	3,904	390	32.1	72.6	58.2	14.4	72,921	

(注)大蔵省の生活保護世帯数3904世帯(2006年4月1日現在)のうち、390世帯をランダム抽出し、世帯員個別に調査を行った。ただし、高齢者世帯の抽出は、入居のケース、施設入居のケースを除く。専業主婦のケースのみを対象とした。
(出所)連中後・厚生健康福祉局理事による調査

■生活保護受給母子世帯の状況

学歴	母子世帯全体		10代出産		保護の世代前継承	
	実数	構成(%)	実数	構成(%)	実数	構成(%)
中学	41	36.7	13	40.4	18	41.9
高校中退	29	27.4	11	39.3	13	30.2
高校以上	36	34.0	4	14.3	12	27.9
合計	106	100.0	28	100.0	43	100.0

(注)大蔵省の生活保護世帯数3904世帯(2006年4月1日現在)のうち、390世帯をランダム抽出し、世帯員個別に調査を行った。世代前継承とは2代にわたって生活保護を受けた場合。
(出所)連中後・厚生健康福祉局理事による調査

■虐待が行われた家庭の状況

家庭の状況	虐待の相談件数	合わせて見られるほかの状況(上位3つ)
ひとり親家庭	460件 (31.8%)	①経済的困難 ②孤立 ③就労の不安定
経済的困難	446件 (30.8%)	①ひとり親家庭 ②孤立 ③就労の不安定
親族・近隣等からの孤立	341件 (23.6%)	①経済的困難 ②ひとり親家庭 ③就労の不安定
夫婦間不和	295件 (20.4%)	①経済的困難 ②孤立 ③育児疲れ
育児疲れ	261件 (18.0%)	①経済的困難 ②ひとり親家庭 ③孤立

(注)2003年度に東京都の児童相談所が受理した児童虐待相談2481件のうち、児童虐待として対応を行った1694件の相談事例を対象。複数回答含む。
(出所)東京都福祉保健局「児童虐待の実態Ⅱ」(2005年12月)

日本の子どもの貧困の特徴

27

- 1)所得再分配政策が貧困対策としての機能を果たしていない—14.2%
- 2)OECD報告(加盟国30カ国)では、ひとり親世帯の貧困率(2000年代半ば)は58.7%(2004年)で、日本は最下位という状況
- 3「大人が2人以上」の世帯であっても、10.5%でOECD加盟国中22位という状況

「子どもの貧困」を通して考える「保育の質」

28

- 1)「子どもの貧困」克服の視点
 - ①子ども個人を権利の主体として捉える
親・家族責任論の克服の課題—政策の分岐点
 - ②劣等処遇の原則から積極的格差是正の原則へ—一般水準以上の支援の必要
 - ③「健康で文化的な」生活の保障—何を貧困といふのかの具体化
 - ④包括的長期的な政策のあり方—現金給付&現物(サービス)給付

「子どもの貧困」克服の4つの視点

29

- ①子ども個人を単位とした政策展開
子どものヴァルネラビリティ(脆弱性)の緩和・軽減・援助をどうするか
- ②劣等処遇の原則から積極的格差是正の原則
- ③施策対象年齢を25歳・30歳までに
子ども・若者貧困削減・防止法の制定
労働生活とどうつなげるか
憲法25条・26条・27条の並び
- ④包括的かつ長期的展望に立った政策展開

2)「保育の質」という理念

30

- いい実践の原則—5つのC
- イギリスのワグナー報告
- caring(個別的ケア)
 - choice(選択)
 - continuity(継続性)
 - change(変革)
 - common values(共通の価値観・理念)

3)乳幼児の権利

国連・子どもの権利委員会による
「一般的見解」第7号(2005年9月)

- 幼い子どもたちは、生まれたときから、固有の興味、能力を持っているとともに弱い立場におかれている社会的な権利行使者(social actors)であり、また、自分の権利を行使するさいには、保護、指導および支援を必要としている
- からだを育ててもらふこと、情緒的な安定感を得ることおよび細やかに指導してもらふことであり、同時に、仲間遊び、探索、学習のための時間と空間

4)ニュージーランドの保育園で感じたこと

- 実践の理念とふたつの重点
- 楽しいこと—他の人がいやがることをしない、食べ物を大切にする
- 「テ・ファリキ」で示された課題
 - ①幸福
 - ②一体感(所属感)
 - ③参加(公平な機会の保障)
 - ④コミュニケーション
 - ⑤探求

5)「保育の評価」

□ 評価をする軸:

- ①構造的な質
- ②実践プロセスの質
- ③チームワークの質
- ④保護者との連携・協同の質
- ⑤コミュニティへのアプローチの質

園長・管理者を評価する軸

「保育の質」をどう高める指導ができているのか



保育者の専門性

そもそも専門性とは何か

一番迷った局面であなたは何を判断し、どのように対応したのかが連続的に問われる

- a実践レベルでの専門性
- b運営レベルでの専門性
- c社会・歴史のなかの専門性

教育・保育実践の中にドラマを創ろう！

—子どもにとって豊かな施設生活とは—

- ①脚本—どんな実践を創ろうとしているのか
- ②出演者—誰を主人公とするのか
- ③風景・背景—人間関係と社会背景
- ④シチュエーション・場面—その局面で何を判断し、どのような対応をしたのか
- ⑤伝えたいこと・訴えたいこと、大切にしたいこと—私たちが伝えたいことは何か、自分の言葉で語っているのか

こんなドラマを思い出します

- @“問題児”を受け入れるかどうかの話し合い
- @子どもの入院付き添い体制
- @集団テーマ日記のなかの意見交換
- @トズラ2ヵ月で30回の子どもの思い
- @生い立ちの記づくりのなかで一この場所、トンネル、無名児としての記録の中から
人間はドラマを再構成しながら考える

職員にとっての希望と貧困とは何か

- 誰のために、何をするのかの原点にたって
希望とは「この子と出会えてよかった！」
課題を発見し続けること！
- 職員にとっての貧困とは何か
貧困とは「燃えくさし症候群」
笑顔が消えること
課題が見えなくなったとき
希望をみんなで創る職員集団のあり方

3. いま求められる子育て支援策

- 1) 保育所・学童保育所の基盤整備
- 2) 安全・安心の認可保育所制度の発展
- 3) 多様な保育ニーズへの対応システム
- 4) 誰もが安心して利用できる保育料体系

新政権の子育て支援策をめぐる問題

- 現金給付重点主義の問題点
「児童のいる世帯」の平均所得の減額-75.7万円
97年767.1万円⇒07年691.4万円
マクロミル「子ども手当と育児に関する調査」09年10月
朝日新聞の投稿欄(09年11月8日)
- 現物サービス給付は旧政権の方針を踏襲・強化
社会保障審議会少子化対策特別部会の動向と政府の対応
保育所待機児童数:4月現在、2.5万人のさらなる増加
2008年度で16カ所しか増設されていない
子育て支援策は現金給付と現物給付の組み合わせ

所得再分配政策の柱

- 教育扶助(保障対象の検討)・就学援助(対象基準を生活保護基準の1.2倍から1.5倍以上に)の機能強化を
- 公的所得移転と税制優遇措置・税の控除システム
- 子育て世帯の賃金依存率92%の改善—社会手当等の増額
- 人生はじめの社会保障としての保育

ストップ!「子どもの貧困」拡大政策10

- 子どもの医療費の無料化政策—子ども医療制度の確立を
- 生活保護の母子加算、児童扶養手当制度の確実な改善を
- 所得再分配政策(税控除と社会保障の拡充)の充実を
- 保育所を「子どもの貧困」対策や子育て支援の拠点に
- 「日本学生支援機構」の奨学金の受給者数の拡大とともに給付方式(貸与から給付へ)の改善を
- 定時制高校の統廃合の再検討を
- 「子どものしあわせ保障」のための国家予算の拡充を
- 次世代育成支援地域行動計画(後期計画)に位置づける
- 児童福祉施設最低基準の改定を
- 「子どもの貧困」削減検討会議の設置

新しい運動としての政策提案

- 私たちが考え創ることのできる「要求に対する具体的な改善策」として取り組んでいく課題としての意味
 - 現場実践者や利用者である保護者、地方自治体の主人公である住民が自らの街を変える運動としての性質
 - 私たちが知恵を出し合って、どんなしごとをするために、どのような政策が必要であるのかを検討するとりくみ
 - 希望と未来を創る運動である
- “誰のために、何をするのか”を問いながら、私たちがいまこそ政策主体としての力量を形成していくこと
- @浅井春夫・高橋光幸・中村強士共編
『保育・子育て政策づくり入門』(自治体研究社、2010年)

4. 保育制度改革の提案 への基本的な批判

1) 保育制度改革の提案の問題点

- 「第1次報告」にみる論理の稚拙さ
- 「公的保育を受けることができる地位」付与を骨格とした「第1次報告」の問題点
- 直接入所契約の導入が保育の市場化の最大の攻防戦
- 保育所運営の不安定化と競争の促進
- 公的保育所制度の崩壊への道としての「第1次報告」

5. 児童福祉施設最低基準制度 の改革

- 児童福祉施設最低基準が示している向上責任
 - 具体的な改善の提案
- ① 最低基準の改定に特化した検討会議の設置
 - ② 無認可保育所(認可外保育施設)の届け出制と立ち入り調査の強化
 - ③ 働く者の健康と生活を守るための条件整備
 - ④ 非正規雇用率の高さの改善

まとめにかえて—世界の保育はどう 変わっているのか—

- ① 「乳幼児の権利」保障のために、最低基準の継続的改定VS最低基準は最低のままで「子どもを大切にしよう」という国民的をどう合意形成していくのか
- ② 「Starting Strong」のために、財政的保障VS公費削減
- ③ 子ども・家族のしあわせのための「最善の努力」VS「経済効率中心の発想」
- ④ はじめて出会う専門職としての条件保障VSワーキングプア化の進行
- ⑤ 現場に裁量権をできるだけ委ねる方向VS管理・統制の強化の方向

希望には、二人の娘がいる。
一人は怒りであり、もう一人は勇気
である。

アウグスティヌス(354年～430年)



47

「今、子どもたちは」 - 子どもの貧困 今、私たちにできること - を聴いて

桜花学園大学 高柳鈴子

はじめて、このタイトルを目にした時、違和感があった。子どもが経済活動をするわけでもないのに、なぜ「子どもと貧困」ではなく「子どもの貧困」という言葉を使うのか、日本語としておかしいのではないかと疑問を持ったのである。しかし、浅井先生の講演を聞いて自分の無知を知った。貧困は、社会の中で生み出され、家族を単位として現われる。貧困の家庭で生きる子どもに焦点をあて、子どもの育ちと人生を、より具体的に把握するために「子どもの貧困」という言葉を使ったのだと理解できた。また、この言葉を使うことで、子どもの権利を侵害している現状をより明確にすることができ、更に、その予防と解決の手立てを考える道すじが広がっていくという深い意味があった。子どもの生活と発達の過程に親世代の生活崩壊をまともに受けているところに今日の子どもの貧困の問題があるという視点である。

さて、ここ1年ほど新聞等でも健康で文化的な最低限度の生活が脅かされているのではないかと思う記事を目にするようになった。最近、朝日新聞にこんなニュースが載った。280円の弁当が売れているという記事である。40歳の男性は、この280円弁当を週に1回食べる時「今日は贅沢をしていると思う。普段は、100円の菓子パン1個で済ませる」というのである。たしか運転手と記事にあったが、働き盛りの男性が菓子パン1個で長時間の労働をするという事実には愕然とした。ショックだった。

浅井先生の講演があったその夜、奇しくも、NHKテレビで「子どもサポートネット『子育て』を考える」という番組を見た。そこで、お腹がすいてひもじい思いをしている子どもの実態が紹介された。アフリカの子どもが餓えに苦しんでいることは知っているが、まさかこの日本で経済的に餓えて辛い思いをしている子どもがいろいろとは思わなかった。でも今現在、実際に餓えている子どもがいるのだ。貧困は、この日本では長く忘れられてきた存在だった。否、見ようとしてこなかったのかも知れない。昨年末、発表された国立社会保障・人口問題研究所の社会保障実態調査によると、「過去1年間に経済的な理由で家族が必要とする食料が買えなかった経験」のある世帯は全世帯で15・6パーセントに上っている。そのうち、子どものいる家庭で両親がいる家庭では17・8パーセント、ひとり親世帯では、なんと38・4パーセントが経済的な理由で家族が必要とする食料が買えなかった経験があるのだ。実際、番組の中で朝食を食べられず登校する生徒が何人かいた。食べざかりの子どもがひもじい思いをしなければならないなんて！今やこの日本には300万人に上る18歳未満の子どもが貧困にさらされている。

この番組の中で汐見稔幸先生が「子どもは、いかに不平等の下に生まれようとも、社会には、その子どもを平等に育てていく役目があるのだ」と言われた言葉が心に響いた。まさに、子どもを権利の主体としてとらえる大人の感性だと思った。子どもを育てることが国の根幹にかかわるという意識が私たち大人に必要なことを改めて感じた。

浅井先生は、子どもの貧困克服のために、具体的政策を立案し実践していく力を付けて行こうと提起された。子どもは、選挙権もなければ自ら権利を主張し政治的な声をあげるのは未熟である。子どもを権利の主体として尊重する大人の感性が強く求められている。子どもが、貧困のため希望を失いつつある中で子どもに希望をどう育むのが求められている。また、私たちが希望を持って働く事ができるようにすることが必要である。「希望には、2人の娘がいる。1人は怒りであり、1人は勇気である（アウグストス）」浅井先生は、更にもう1人いるとすれば、優しさではないかと付け加えられた。

スターティング・ストロングー人生最初のところをどれだけ手をかけ、心を込め、財政的保障をするかで、その子どもの後々の人生が大きく違って来る。それが、引いては活力ある社会につながっていく。「人は泣きながら生まれてくる（リア王）」だからこそ、心をこめて受け止めていきたいと思った。私たちの学校の創設者大溪専氏が100年以上も前に、貧困により医者にかかることができない人々のために看病婦学校を作った。これが私たち名古屋短期大学・桜花学園大学の前身である。私たちは、この創設者の崇高な精神を今に受け継いでいる。

浅井先生が最後に歌われた「タンポポの花が咲くころに」の歌声が私の胸にも沁み、拡がった。

3	2	1
学園のかたすみに つもつた雪がとける頃に じいちゃんがなくなつたつて手紙がとどいたよ 父さんも母さんも どこかでこの事を知るだろう 父さんと母さんが仲直りするだろう きつと会えるね タンポポが咲く頃に きつと会えるね タンポポが咲く頃に	学園のかたすみで コオロギの音がする頃に おみやげちよつぱり持つて じいちゃんがやってきた 父さんはなさけないろくでなしだとなげいていたし 母さんはあわれな 女だと泣いていた そんなの うそだよ ボクは信じない	学園のかたすみに タンポポの花が咲く頃に おみやげたくさんもつて母さんにきてほしい たつちゃんの母さんは ひと月に一度はやってくるし みつちゃんの父さんは きのう遊びにきた どうして ボクだけ 誰もこないのか

子どもの貧困

——子ども時代のしあわせ平等のために——

浅井春夫氏の講演を聞いて

名古屋短期大学 原田明美

子どもの貧困率 14.2%・・・この数字の重さと数字の奥にある子どもの姿を、熱く、やさしさを込めて、語っていただきました。私自身、この数字の持つ意味をもっと深く学ばなければならぬと改めて思いました。

きわめて多忙な中で、たくさんの著作を著され、ほうんネットを始め積極的に活動をされているエネルギーはどこから湧きあがるのであろうと以前から思っていました。そして、浅井春夫氏の子どもに対するやさしさ、人間に対する信頼と希望、平和に対する思いは、ご自身の広島での生い立ちや、12年間の養護施設での指導経験などから、ふつふつと湧きあがってくるものと確信しました。この機に「子どもの貧困」を真正面から取り組んで見える浅井春夫氏の講演を拝聴する機会に恵まれたことは我々教職員にとって幸運なことであり、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

講演を聞いて学んだことを次の5点にまとめました。

1. 子どもの貧困を可視化することの大切さ

14.2%（7人に1人）の子どもが年間114万円以下の所得で生活していると言われても中々ピンときません。しかし、具体的に医者にかかれぬ、温かい布団で寝ていない、親からあきらめと無関心の存在で育つ、行きたくても授業料が払えず高校・大学へ行けない、中卒・高校中退では就職できず一度転職すると下降をたどると言った現実を聞き、貧困は子どもの責任ではないが、本人の意思とは反対に貧困の連鎖が起きる実態を知りました。また、貧困が虐待の背景にあり、虐待者の3割が正規就労で7割が非正規就労、虐待者の課税世帯は3分の1で他は非課税世帯その経済的困難が夫婦の不仲や心身の不安定を生み虐待に繋がる。貧困な家庭の子どもは自分では声を出せません。子どもを丸ごと受け止め、子どもが背負っている生活を知り、それをもっと世の中に知らせる必要を感じました。

2. 国の子どもに対する政策を知る

子どもの貧困率の高さは、世界からみると世界4位。国民総生産第2位の日本が子どもの貧困率で貧困率の高い順で世界4位。一人親世帯の貧困率は58.7%で、貧困率の低い順で世界最下位です。つまり一番貧困率が高いということです。会場からも驚きの声が聞かれました。しかもそれは、政府の政策によって作られているのです。所得再配分後の貧困率は世界各国が低下させているのにたいして、日本は反対に貧困率を増加させている。「もっとも困難な生活を強いられている子どもや子育て家庭を応援し、教育権や、生存権保障を国家責任として果たしていないという問題」とレジュメに記されています。

3. 子どもの権利条約は保育者のバイブル

氏は、子どもの権利条約は保育者のバイブルと言われました。何度も読んだのですが、心に染みる学び方をしていなかったと反省しました。特に、2005年の国連・子どもの権利委員会による「一般的見解」第7号は、保育所で働く保育者は学ぶ事が必要と感じました。「幼い子どもたちは、生まれたときから、固有の興味・能力を持っているとともに弱い立場におかれている社会的な権利行使者（ソーシャルアクション）であり、また、自分の権利を行使するさいには、保護、指導および支援を必要としている」と資料にあります。子どもは、生まれながらに、権利行使者であり、権利の主体者である。しかし、非常に弱い立場にいるために、親などの養育者から情緒的な安定感を持ち、細やかに指導されることが必要である。子どもの権利を守る意識を普遍的にする為に研究者の役割があると感じました。

4. 求められる保育の質

保育の質の視点として「最低基準等の構造的な質」「実践プロセスの質」「チームワークの質」「保護者との連携・共同の質」「保護者との連携・共同の質」「コミュニティへのアプローチの質」を出されました。強調されたのは、チームワークの質でした。若い保育者が育つ、みんなの力を出し合い高め合う保育者集団をつくる大切さを感じました。

5. 保育者が政策主体者としての力量を高める

現場の実践者が、政策を持ち提案していく力を持つ必要を言われました。実践者がどんな仕事をするために、どのような政策が必要であるのかを検討する取り組みが大切であり、地方自治体の主人公である住民が自らの街を変える運動として、政策を持ち提案していく力量を持つ必要があることを強調されました。ここにも研究者の役割が求められていることを感じました。

以上の他にもたくさんの示唆を得ました。ありがとうございました。

最後に、氏は、「タンポポの花が咲く頃に」（伊藤浩作詞作曲）の歌をうたわれました。この歌は、氏の著書『子どもの貧困』（2008 明石書店）を購読していたので、知ってはいましたが、実際に歌を聞くのは、初めてでした。心に染みる歌でした。

7年目を迎えた子育て交流会 - 今までの振り返りと今後の方向性 -

荒川良子 基村昌代 穴戸洋子 高須裕美

学生参加の子育て交流会

2003年から名古屋キャンパスで始まった子育て支援活動も、7年目を迎えました。地域に開かれた大学として、0歳から3歳の未就園の子どもとその保護者が、いつでも、だれでも気軽に参加できる「子育て交流会」をめざしてきました。

年々、地域に根ざし、1年目、年間138組の参加者が、5年目からは、年間1000組を越えるまでに増えてきました。時には身動きできないほどのたくさんの参加者があり、年齢別にわけたり、付属幼稚園の広いホールを借りて実施したりしています。

保育者養成校として、このキャンパスで保育学部、保育科、専攻科保育専攻の学生が約1100人、保育者を目指して学んでいます。今、保育現場に求められている子育て支援を、学生時代から学ぼうと1年目から、さまざまな学生参加を試みてきました。

まず、子育て交流会で使う部屋の環境づくりに取り組みました。交流会室は、毎年、学生が壁面を制作し、和やかな雰囲気をつくっています。そして、牛乳パックを使った大型の滑り台から、手作り絵本、ボールプール用の布製の泣き笛ボールなどのおもちゃも学生の手によるものです。



また、保育科、保育学部の教員の指導のもと、手遊び、人形劇、紙芝居や絵本の読み聞かせ、リズム遊び、劇、楽器の演奏などにも取り組んでいます。

保育者をめざし学んでいる学生ですが、日ごろ、なかなか子どもや保護者に接する機会がありません。

とまどいながらも、一生懸命計画をたて、練習し、緊張しながら

子どもとその保護者に向き合っている学生の取り組みとその内容を今回は追ってみました。そして、そのなかで学生が何を学んでいるかを明らかにし、これからの保育者養成校の子育て支援の学生参加のあり方をさぐっていきたいと思います。

親子交流会参加でのとまどいと学び

保育を学ぶ学生にとって、キャンパス内に子育て支援室があり、親子の触れ合う姿や子ども達の表情を目にしたり、声を耳にすることはとても有意義なことです。その支援室に学生は開所当時から参加してきました。

専攻科保育専攻1年の学生は、5月から12月まで週2回、長期の保育特別実習をしているので、子ども達との触れ合いは継続的に経験しています。しかし、保護者と直接触れ合うことは初めての経験であり、子育て支援を学ぶ大切な機会となりました。

今年度は5回（7月、9月、10月、11月、1月）実践しました。7月、初めて支援室に足を踏み入れた学生の多くは次のような感想を述べています。

- ・部屋にいる親子の人数の多さと親子の声の大きさに驚いた。
- ・支援室に参加している保護者は、他の母親と交流を持ちたい、という思いが強く、母親同士のおしゃべりが非常に多かったし、自分の子どもを見ていない母親が何人か見られた。



こうした状況の中で、子育て支援者としてどのようにかかわっていけばいいのか、どの学生もとまどいました。はじめは、計画したことを滞りなく進めていくことに精一杯だったように思われました。

支援室での実践は、実践グループと観察のグループに分かれて行ったので反省も客観的に出されました。

- ・親子の姿の把握が甘かった。
- ・子どもの反応に答えられていなかった。
- ・計画どおり進めようとあせって、早口になっていた。
- ・細かい部分での配慮に欠けていた。

こうした反省は、9月の実践では予想される親子の姿やその対応を細かく押さえ親子のかかわりもよく見ることができました。例えば、

- ・制作の場面において、保護者が「どこにはろうか？ここにする？」と子どもに声をかけながら一緒に楽しむ姿がみられた。
- ・子どものペースに合わせて作っている保護者の姿を見かけた。

一方、保護者自身が制作に夢中になり、子どもはただそばに居るだけという親子の姿を目にしたときは、子どもが参加できるように促し、出来たときには保護者の前で子どもを褒め、子どもの喜ぶ表情を見てもらうなど支援者としての役割を果たすことができたと思う、という学生もいました。10月になると学生も少しは慣れ、今までの反省を踏まえ、遊びを盛り上げる工夫・雰囲気作り・声の大

きさ・視線の向け方等、かなり細かい配慮もできるようになり、予想しないアクシデントにも落ち着いて対応することができました。

こうした実践を通して「子育て支援とは何か？」という問いに対して、ある学生はこのようにまとめています。

子育て支援とは、ただ楽しい事を提供することではない。子育ての中心になるのは親子、保護者の思いを受け止めること、保護者が子育てでどんな悩みを持っているか支援者は耳を傾け、心を寄せることが大切。保護者が主体となる子育て支援をしていく為に、支援する保育者の力量及び人間性を高めていかなければならない。

実践は緊張し、それぞれの役割を果たすのに必死だったと思われます。しかし、支援室で親子のかかわり、保護者同士のかかわり、保護者と支援者とのかかわりを見たこと、自らかかわってみたことで子育て中の保護者の気持ちに触れることのできる貴重な経験だったと思います。



支援室はキャンパス内にあります。貴重な経験をした学生達は、今まで以上に積極的に親子の姿に目を向け、親子の会話に耳を傾けていくことでしょう。

子ども達の笑顔が子育ての自信につながるように、支援室でのいろいろな人とのかかわり、経験が、「また行きたい!」「次はいつかな?」という期待につながっていくような支援室であってほしいと、どの学生も感じ、改めて子育て支援の大切さを学びました。

親子での音楽遊び

専攻科保育専攻2年の学生は、保育士資格をすでに取得し、現場での長期の実習を経験しています。しかし、実際に集団あそびをリードする経験は少なく、学生にとって、子育て支援室は実践経験を積む良い機会になっています。2回の音楽実践を通して、学生にとっての学びを述べていきたいと思えます。

10月の実践では、イメージして表現するあそびを活動の柱にして、子どもの表現力を引き出そうというねらいを持って臨みました。大きな幼稚園のホールに入って、知らない子どもたちと一緒に遊ぶのは、少なからず緊張するため、導入からリラックスできる活動を取り入れました。

1回目：円になり、声を出さずに学生の持つうさぎのパペットに向かって走ってタッチしに行く。

2回目：「ワ～!!」と、声を出しながらタッチしに行く。

保護者から離れられない子どもたちを遠く夢中にさせるような活動を実践しようと、学生が様々な声かけを試していました。「大きな栗の木の下で」「どんぐりころころ」「とんぼ」「幸せなら手をたたこう」など、身体表現を伴う歌を取り入れて、楽しい雰囲気を作りました。主活動として、「できる

かな？」という歌絵本を使って、動物の身体表現をしてあそび、音楽を通して、保護者との触れ合いを深めようとしてしました。10月の実践を終えて、自分たちの課題について、以下のような意見が挙げられました。

- ・兄弟のいる保護者は、二人も膝に乗せて大変だった。子育て支援では、育児に疲れている保護者を休ませる取り組みがあっても良いのではないか。
- ・音楽なので、様々な活動を盛りだくさんにせずに、内容を減らしてゆったりと楽しむ。リードする学生はゆっくりと話すことが必要。
- ・保護者を休ませるような音楽活動を取り入れてはどうか。

今回の実践の反省を踏まえて、11月は、活動内容を減らし、リラックスした雰囲気の中で子ども同士が楽しめるような活動を取り入れました。秋の歌を歌いながら、感覚遊びを楽しんだり、大きなバルーンの中で心身ともにリラックスしたりするような時間を持ちました。



2回目を終えた反省会では、以下のような意見が出ました。

- ・親子での遊びの中で、言葉で動きを一生懸命説明する学生があったが、理屈を説明しなくても簡単な遊びは、真似だけでも伝わったのではないか。
- ・乳児との親子遊びを説明する際の言葉遣いを指示語ではなく、もっと柔らかい表現はないか。

などの意見が挙げられました。学生自身は、反省点ばかりが気になる様子ですが、11月は、時間配分に余裕を持たせることができたことで、保育士資格を持つ学生に、子育てについての相談をされる保護者、バルーンの中に親子共々入り込んでリラックスする姿も見られました。

継続的な実践活動を行うことで、活動内容や雰囲気の作り方、言葉の間の取り方などを改善して再度挑戦することができます。また、この成功経験が、実践力を持つ保育者としてスタートする自信とエネルギーにつながります。子育て交流会は、学生にとっても非常に重要な学びの場であり、指導者にとっても、学生の実践力の向上を身近に見ることができる場になっています。

付属幼稚園でのクリスマス会

今年度の付属幼稚園のホールを使用したクリスマス会には約60組のたくさんの親子の参加がありました。今回のコンセプトは「子どもも大人も楽しめる交流会」でした。そこで保育学部4年生の学生が、乳幼児を対象にした手遊びや歌遊びと、「白雪姫」のミュージカルを実施しました。

小さな子どもを育てている保護者の方々はコンサートや観劇など、劇場へ足を運ぶことは大変難しい状況です。保育



子育て研究所主催の子育て交流会は、子どものためだけではなく、子育てをしている保護者の方々のための場所でもあります。そのため、保護者の方々にもミュージカルを観て「ほっこり」した温かな気持ちになってもらえればと、内容もアカデミックなものに仕上げられるよう、発声、身体表現、舞台マナー、音楽・舞台表現法などに力を入れ、少しでも芸術に触れて頂ければという気持ちで行いました。

約20分の舞台は0歳から3歳の幼い子どもにとって大変長い時間です。演じる学生の心配もそこに集中しました。しかし、終了してみると、ほとんどの子どもたちは舞台に集中し、声を出すのは劇に入り込んで発する感嘆の言葉でした。そして保護者の方々の終了後の笑顔がクリスマス会の成功を物語っていたと自負しています。

幼少時代より芸術に触れるということは数少ない機会であります。しかし、そのような機会をもつことで、子どもたちの感性を引き出すお手伝いできればと思っています。今後も、幼稚園の果たす子育て支援と保育子育て研究所の活動の一環として、このような催しを継続していきたいと考えています。



2009年12月08日 名古屋短期大学付属幼稚園ホールにて

まとめと今後の課題

7年目を迎えた子育て交流会も地域に根ざし、参加者も年々増え、時には子育て交流会室からあふれることもありました。そこで、0歳児の赤ちゃん、1～2歳児、2～3歳児と年齢別にわけて実施しました。それでも常時、20～30組の親子の参加がありました。

ここに、学生が加わると、まさに身動きできない状態になります。せっかくゼミの学



生を連れて訪れたのに、部屋に入れられない状態の日もありました。

子育て支援室が各地に作られ、支援活動が徐々に広がっています。育児に悩み、密室の中で孤独に子育てをしている保護者が、こうした場を強く求め、どの支援室も参加者が増えています。

それでも、これだけこのキャンパスで実施している交流会の参加者が多いのは、やはり、他の子育て支援室にはない特色があるからです。

それは、学生参加による魅力です。子どもたちは、若い学生に遊んでもらったり、歌をうたったり、手遊びやリズムあそびをいっしょにしたり、ペープサートや劇や絵本を見るのが大好きです。将来、保育者をめざしている学生にとっても実際に子どもに触れ、保育を実践し、直接、保護者に接し子育て支援を学ぶ大切な場になっています。今回は、専攻科保育専攻1・2年生と保育学部4年生の取り組みを紹介しましたが、このほかにも、シャボン玉あそび、風船バルーンづくり、ドングリ拾い、コマづくり、七夕かざり、豆まきなどの学生参加がありました。

もう一つの欠かせない魅力は、大学の教員の存在です。保育者養成大学には、美術、音楽、食育、心理、障害、保育等々の専門の教員がいます。その教員がそれぞれの専門分野をいかし、学生を指導し、直接的、また、間接的に協力をしてくれています。

こんなに、魅力的で地域の保護者に期待され、学生にとっても学びが多い子育て交流会は、現在、非常勤の保育者3名とボランティアのスタッフで週2回実施しています。専任のスタッフがいれば、もっと回数が増やせます。そして、このキャンパスで学んでいる約1100名の保育者をめざしている学生が、いつでも気軽に参加できます。そんな専任のスタッフの常時配置の実現が、今後の保育子育て研究所の大きな課題です。

2009年度 子育て交流会の経過・参加人数・内容

保育子育て研究所

- 4月14日(火) 第1回 子育て交流会 天気:雨
 子ども 46名 大人 42名
 注意事項説明
 手遊び「いわしのひらき」「トントントントンアンパンマン」(水谷)
 わらべうた「たけのこ」お母さんにお話 (上村)
- 4月17日(金) 子育て支援室開放日(2,3歳児)
 子ども 28名 大人 26名
 手遊び「アンパンマン」「パンダうさぎコアラ」「あたま・かた・ひざボン」(水谷)
 ペープサート「くるくるアンパンマン」「こぶたぬきつねこ」絵本「ごあいさつ」(宍戸)
- 4月21日(火) 第1回 赤ちゃん交流会 天気:くもり(強風)
 子ども 10名 大人 9名
 ふれあいあそび「ちょうちょ」「重ねカップ」「だるまさん」
 「とうきょうとにほんばし」「ここはどうちゃんにんどころ」(上村)
- 4月24日(金) 第2回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴
 子ども 35名 大人 30名
 手遊び「あたま・かた・ひざ・ボン」
 ストロートンボを作ろう!(ストローと牛乳パックを使って)
 絵本「ひとりであそび」(水谷)
- 4月28日(火) 子育て支援室開放日(0,1歳児) 天気:晴
 子ども 27名 大人 25名
 ふれあいあそび「むすんでひらいて」「じょうぶなす」「てをたたきましょう」
 「ゆらゆら」「たまごたまご」
 絵本「ひよこ」(水谷)
- 5月1日(金) 第3回 子育て交流会 天気:晴
 子ども 36名 大人 30名
 絵本「おしくらまんじゅう」新聞紙で「かぶと」を作ろう!
 絵本「いないいないばあ」(清)
- 5月12日(火) 第2回 赤ちゃん交流会 天気:晴
 子ども 12名 大人 10名
 ふれあいあそび「いないいないばあ」「しゃんしゃんしゃん」「とうきょうとにほんばし」「いちばんどりないた」
 詩でふれあい「チュとキュ」
 子どもの感じる暑さについて(上村)
- 5月15日(金) 子育て支援室開放日(2,3歳児) 天気:晴
 子ども 40名 大人 35名 学生 9名(専攻科)
 みんなで歌おう「こぶたぬきつねこ」ペープサート「けんちゃんのはみがき」
 紙芝居「ごきげんのわるいコックさん」(宍戸)
- 5月19日(火) 第4回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴
 子ども 48名 大人 43名
 手遊び「トントントントン アンパンマン」絵本「かみさまからのおくりもの」
 くるくるコプターを作ろう!(色画用紙とひもを使って)(水谷)
- 5月26日(火) 子育て支援室開放日(0,1歳児) 天気:晴
 子ども 44名 大人 41名
 手遊び「むすんでひらいて」「じょうぶなす」
 絵本「いないいないばあ」(水谷)
- 6月2日(火) 第5回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴
 子ども 60名 大人 53名
 手遊び「かえるのよまわり」
 ピョンピョンがえるを作ろう!(牛乳パックを使って)(水谷)

-
- 6月5日(金) 第6回 子育て交流会 (2,3歳児) 天気:雨
子ども 30名 大人 23名
ふれあい遊び
絵本「びよーん」「おふねがぎっちらこ」を読みながら
体操「ぐるぐるどっかーん」「バスにのって」「どうぶつたいそう 1,2,3」(清)
- 6月9日(火) 第7回 子育て交流会 (1,2歳児) 天気:くもり
子ども 62名 大人 59名
手遊び「めのまどあけろ」「むすんでひらいて」「チューリップ」「パンやさん」
「ぞうきん」
絵本「かみさまからのおくりもの」(宍戸)
手遊び「トントントントン アンパンマン」(水谷)
- 6月16日(火) 第3回 赤ちゃん交流会 天気:晴
子ども 11名 大人 9名 学生 10名
わらべうた・ふれあい遊び「でろでろつのでろ」「ブランコブランコ」
「だるまさんだるまさん」「とんでけとんでけ」
ふうせんで遊ぶ(上村)
- 6月24日(水) 臨時交流会 (1,2歳児) 天気:くもり
ふれあい遊び
「おおなみこなみ」「いっぼんばし」「いわしのひらき」「アンパンマン」(水谷)
うたつておどろろ「崖の上のポニョ」「ドラえもん」「ドンスカ」「おうえんだん」
(吉見ゼミ1年)
- 6月26日(金) 第8回 子育て交流会 (2,3歳児) 天気:晴
子ども 46名 大人 36名 学生 11名(専攻科)
手遊び「いわしのひらき」(水谷)
パネルシアター「ポンポンポケット」、牛乳パックで「びよんびよんがえる」
手遊び「りんごがごろごろ」、紙芝居「こぶたのころちゃん」(専攻科学生)
- 6月30日(火) 第9回 子育て交流会 (1,2歳児) 天気:雨
子ども 42名 大人 38名
ふれあい遊び「おおなみこなみ」「りんごがころころ」「いっぼんばし」
「あたまかたひざボン」
紙芝居「わんわんわん」(水谷)
- 7月7日(火) 第4回 赤ちゃん交流会 天気:くもり
子ども 9名 大人 9名
ふれあい遊び「ささにたんざく」「てるてるぼうず」「おおなみこなみ」
「すきだよ」「でろでろつのでろ」(上村)
- 7月10日(金) 第10回 子育て交流会 (2,3歳児) 天気:くもり
子ども 51名 大人 44名 学生 10名(専攻科)
手遊び「トントントントンアンパンマン」「でんでんむし」
ペープサート「さかながはねて」「さかなつり」
みんなでうたおう!「しあわせならてをたたこう」
大きな絵本「きんぎょがにげた」(専攻科学生)
「いわしのひらき」(水谷)
- 7月14日(火) 第11回 子育て交流会(作ってあそぼう) 天気:晴
子ども 57名 大人 52名
金魚を作ろう!(ヤクルトの容器を使って)
水遊び(金魚すくい、芝生のスプリンクラーで)(水谷)
- 7月17日(金) 第12回 子育て交流会 天気:雨
子ども 18名 大人 18名
絵本「なーらんだ」「うしろにいるのだあれ」
ヘリコプターを作って遊ぼう
ペープサート「さんびきのやぎのがらがらどん」(清)
-

- 9月4日(金) 第13回 子育て交流会 (2,3歳児) 天気:くもり
子ども 28名 大人 24名
手遊び「めのまどあけろ」「カレーライス」
パネルシアター「カレーライス」(宍戸)
- 9月8日(火) 第5回 赤ちゃん交流会 天気:晴
子ども 13名 大人 11名
わらべうた「おつきさまえらいな」「こめついたらはなぞ」
ふれあいあそび「ふくすけさん」「でろでろのでろ」「おおなみなみ」(上村)
- 9月11日(金) 第14回 子育て交流会 (2,3歳児) 天気:晴
子ども 23名 大人 21名
ペープサート「かくれんぼ」
うた「こぶた・たぬき・きつね・ねこ」(水谷)
- 9月15日(火) 第15回 子育て交流会 (作ってあそぼう) 天気:雨
子ども 24名 大人 22名
うた「こぶた・たぬき・きつね・ねこ」
こぶた・たぬき・きつね・ねこ を作ろう! (折り紙を使って) (水谷)
- 9月18日(金) 第16回 子育て交流会 (1,2歳児) 天気:晴
子ども 27名 大人 24名 学生 11名(専攻科)
パネルシアター「たまごのなかから」「きつねのばけくらべ」
絵本「だるまさんが」(専攻科学生)
- 10月2日(金) 第17回 子育て交流会 (2,3歳児) 天気:雨
子ども 31名 大人 29名
しかけ絵本「おめん」
ぞうさんを作ろう (色画用紙で)
絵本「ぞうさん」
紙芝居「アンパンマンとしょくぱんまん」(清)
- 10月6日(火) 第6回 赤ちゃん交流会 天気:雨
子ども 13名 大人 12名
ふれあい遊び「おおなみなみ」「だるまさん」「一本ばし」「あなたのおなまえは」
紙芝居「はーい」(水谷)
- 10月9日(金) 第18回 子育て交流会 (2,3歳児) 天気:晴
子ども 21名 大人 19名
手遊び「とんとんとんとんアンパンマン」「一本ばし」「大きなくりの木の下で」
「いわしのひらき」「きゅうり」
絵本「どんぐりどんぐり」(水谷)
- 10月13日(火) 第19回 子育て交流会 (作ってあそぼう) 天気:晴
子ども 28名 大人 25名
ぱくぱくガエルを作ろう! (色画用紙とシールを使って) (水谷)
- 10月16日(金) 第20回 子育て交流会 天気:晴
子ども 23名 大人 21名
手遊び エプロンシアター (宍戸)
- 10月20日(火) 第21回 子育て交流会 天気:晴
子ども 15名 大人 14名
手遊び 絵本 パネルシアター (荒川)
- 10月23日(金) 第22回 子育て交流会 (1,2歳児) 天気:晴
子ども 15名 大人 14名
集団遊び「おおなみなみ」「どんぐりころころ」「大きなくりの木の下で」
絵本「ぎゅっ」(水谷)
- 10月27日(火) 第23回 子育て交流会 (幼稚園ホール) 天気:晴
子ども 57名 大人 51名 学生 7名(専攻科)
身体あそび「なれるかな」…
歌をうたおう「しあわせなら手をたたこう」「どんぐりころころ」
「大きなくりの木の下で」(専攻科学生)

-
- 11月7日(土) 大学祭 子育て支援室開放 天気:晴
子ども 16名 大人 13名
- 11月8日(日) 大学祭 子育て支援室開放 天気:晴
子ども 12名 大人 9名
- 11月10日(火) 第7回 赤ちゃん交流会 天気:くもり
子ども 16名 大人 15名
ふれあい遊び、わらべうた
「ゆーすりゃゆすりゃ」… (上村)
- 11月13日(金) 第24回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:くもり
子ども 20名 大人 19名
手遊び「とんとんとんとんアンパンマン」
絵本「ぎゅうってだいすき」「いもほりよいしょ」
おもいもを作ったべよう!(薄い紙で)
ペープサート「おもいほり」(清)
- 11月17日(火) 第25回 子育て交流会(幼稚園ホール) 天気:雨
子ども 24名 大人 22名 学生 6名(専攻科2年)
季節のうた「どんぐりころころ」「まつぼっくり」「げんこつやまのためきさん」…
身体あそび「ニコニコ列車」
バルーンに入ろう!(専攻科学生)
- 11月20日(金) 第26回 子育て交流会(作ってあそぼう) 天気:晴
子ども 30名 大人 27名
くつしたでパペットを作ろう!(水谷)
- 11月24日(火) 第27回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:くもり
ペープサート「どんぐりどんぐり ころころ」
うた「どんぐりころころ」
どんぐりひろい、ひろったどんぐりでコマを作ろう!(水谷・田端)
- 11月27日(金) 第28回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:くもり
子ども 20名 大人 18名
パペットで「かぜひき」
ふれあい遊び「ゆさゆさ」「タオル」
絵本「だれかなだれかな」
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」(荒川)
- 12月1日(火) 第8回 赤ちゃん交流会 天気:晴
子ども 7名 大人 7名
わらべうた遊び「えんどうまめみつつくて」(でんでんだいこ)
「うえからしたからおおかぜこい」(透ける布)
「ここはとうちゃんにんどころ」「りんりんなるよかわいいすずが」
「おすわりやすいすどっせ」(上村)
- 12月4日(金) 第29回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴
子ども 16名 大人 14名
手遊び「アンパンマン」
絵本「三びきのやぎのがらがらどん」(水谷)
- 12月8日(火) 第30回 子育て交流会(クリスマス会) 天気:晴
子ども 65名 大人 59名
学生 22名(基村ゼミ7名、石山ゼミ5名、専攻科10名)
手作りオモチャで遊ぶ
うた「赤鼻のトナカイ」「あわてんぼうのサンタクロース」(石山ゼミ学生)
ミュージカル「しらゆきひめ」(基村ゼミ学生)
- 12月11日(金) 第31回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:雨
子ども 19名 大人 18名
ペープサート「だれかなだれかな」
体遊び「むっくりくまさん」
絵本「よくきたね」(荒川)
-

- 12月15日(火) 第32回 子育て交流会(作ってあそぼう) 天気:晴
子ども 26名 大人 24名
手遊び「アンパンマン」
クリスマスツリーを作ろう!(新聞紙で)(水谷)
- 12月18日(金) 第33回 子育て交流会(23歳児) 天気:晴
子ども 13名 大人 11名
パネルシアター「10人のサンタ」
絵本「いろいろサンタのプレゼント」「サンタがきたらおこしてね」
「おたすけ小人のクリスマス」(清)
- 1月15日(金) 第34回 子育て交流会(12歳児) 天気:晴
子ども 15名 大人 13名
絵本「ゆきだるまのあたま」「おしくらまんじゅう」「こちょこちょ」
エプロンシアター「おおきなにんじん」
手遊び「アンパンマン」(清)
- 1月19日(火) 第9回 赤ちゃん交流会 天気:晴
子ども 9名 大人 7名
ふれあい遊び いないいないばあ、ボール遊び、布を使ってかくれんぼ
ゆらゆら遊び (上村)
- 1月26日(火) 第35回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴
子ども 49名 大人 43名
手遊び「トントントントンひげじいさん」「おにのパンツ」
紙芝居「ひまわりパンツ」
雪だるまを作ろう!(新聞紙と白レジ袋を使って)(水谷)
- 2月9日(火) 第10回 赤ちゃん交流会 天気:くもり
子ども 18名 大人 17名 学生 8名(石山ゼミ3年)
ふれあい遊び「いないいないばあ」「ここはどうちゃんにんどころ」…
遊びの紹介「ものを入れる・出す遊び」等 (上村)
身体あそび「おおきなかぶ」(学生)
- 2月16日(火) 第36回 子育て交流会(23歳児) 天気:くもり
子ども 27名 大人 26名 学生 10名(宍戸ゼミ1年9名、2年1名)
絵本「はなげのはなし」(卒業制作)「しろくまちゃんのほっとけーき」(2年)
身体あそび「ピポパたいそう」「どうぶつえんにいこう!」(創作)(1年)
- 2月24日(水) 第37回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴
子ども 34名 大人 31名
変身えほんをつくろう!(厚紙を使って)
手遊び「とんとんとんとんアンパンマン」(水谷)
- 2月26日(金) 第38回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:雨
子ども 12名 大人 11名
絵本「だ・る・ま・さ・ん・が」「たまごのえほん」
手遊び「あたま、かた、ひざぼん」「ころころたまご」「アンパンマン」(荒川)
- 3月2日(火) 第11回 赤ちゃん交流会 天気:晴
子ども 14名 大人 13名
わらべうたでふれあい遊び「たけんこがはえた」「あんよぼんぼん」「おでこにちゅ」(上村)
- 3月5日(金) 第39回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴
子ども 29名 大人 26名
びっくり箱を作ろう!(紙コップと傘袋を使って)
手遊び「トントントントン アンパンマン」(水谷)
- 3月9日(火) 第40回 子育て交流会(大きくなったね) 天気:雨
子ども 45名 大人 40名 学生 19名
手遊び「トントントントンひげじいさん」「一匹の子ねずみ」(豊田ゼミ学生)
飛び出す写真たて「おおきくなったねカード」(田端)

サンタクロースってほんとにいるの？

桜花学園大学 田中義和

授業で「探検あそび」という遊びをとりあげています。「探検あそび」というと、秘密基地をつくって、隊長を決めて探検にでかけるのが定番ですが、ここでいう「探検あそび」は、このような一般的な探検あそびとは一味ちがいます。この世の中に存在しないものを子どもたちが信じて探検します。それは、恐竜や忍者やカッパであったり、エルマー（『エルマーの冒険』福音館書店）やへなそうる（『森のへなそうる』福音館書店）、ガリバー旅行記のガリバーさんなど、子どもたちの大好きな絵本や物語の登場人物であったりします。この種の保育実践記録はたくさん出されており、どれもハラハラ・ドキドキ・ワクワクの保育実践が展開されています。しかし、この世に存在しないものをどうして子どもたちが信じてしまうのか、それは大人が子どもを信じこませるからです。大人が子どもを「だます」わけです。

学生の中には、こんなに本格的に保育者が純真な子どもをだましていいのか、信じきって遊びの世界に入りこんでいる子どもの姿に胸が痛むという感想を持ったり、そもそも「嘘をつくのはいけない子です」と教えている保育者が堂々と子どもに嘘をつくことに抵抗を感じることもあるようです。しかし、子育てをする中でいろいろな場面で子どもに嘘をついたり、だましたりしない親や保育者はいません。たとえば「サンタクロース」があります。授業で学生たちに子どもころのサンタクロースの思い出を書いてもらっていますが、楽しいもの、興味深いエピソードがいっぱいです。このエピソードを紹介しながら、大人が子どもを「だます」ことについて考えてみたいと思います。以下のエピソードは、私の授業で学生たちが「サンタクロースの思い出」として書いて提出したものです。

あっ 鈴の音がするよ！

私は小学校5年生までサンタクロースを信じていました。毎年イヴの一週間くらい前に家のリビングの窓を全開にし、母が「サンタさんに届くくらい大きい声で欲しい物頼んでおかないとサンタさん来てくれないかもよ。」と私たちに言い、そして私と弟は毎年大きな声で「サンタさーん、〇〇と〇〇を下さい。」と2人で空に向かって頼んでいました。そしてイヴ当日。必ず毎年のようにイヴの日は、父、私、弟はそろってお風呂に入り、湯船の中で、父は本当は聞こえてくるはずがないのですが、演出で「あ！鈴の音がするよ」と私たちに言い（やはり父が言わないと鈴が鳴ることは私たちは気づかないので）そうすると本当に家の外で鈴のなる音が聞こえてきました。なんとそれは母が鈴を持って家の回りを3周も走っていたのです。あとから聞いてとても驚きました。そして私たちは鈴の

音に気付き、「あっほんとだ！鈴の音がする！！」とっていました。そこでやはり私たちはまだ子どもだったので鈴の音がすれば反射的に窓を開けてサンタの姿を見たいもので、だからそれを父が察知して私たちが窓を開けさせないように頑張っていたそうです。私たちがお風呂から出てそうすると母はもう家の中にいて、「さっき鈴の音がしてたね。外見に行こうか。」と私たちに言い3人そろって玄関の方へ行くと自分たちが頼んだプレゼントが置いてありました。そして最後に空に向かって「サンタさん ありがとー。」とお礼を言っていたそうです。

なんと子どもたちにサンタクロースの存在を信じさせるために、12月の寒い冬の日には家の周囲を鈴をならしながら廻っているお母さんがいるのです。ほんとに驚くばかりです。サンタクロースなんて、この世の中に存在しないものですから、親たちは子どもたちにサンタクロースを確信させるために様々な作戦を実行します。サンタからFAXが届いたり、子どもたちだけでなく親にもプレゼントが届いたり、なかにはサンタに電話をしたものもありました。

サンタと電話

私はサンタさんと電話で話をしたことがありました。お父さんが、「今からサンタさんに電話するから、何が欲しいか言うんだよ」と言うと受話器をもってダイヤルをまわしてから、英語で何か話し始めたのでごくワクワクしました。電話をかわってもらおうと、何を言っていたのか全く分からないけど英語だったので、本当のサンタさんだと思い、必死でプレゼントのお願いをしました。大きくなってから父にあれは何だったのかと聞いてみたら、あれは父がアメリカで長期滞在していた時のホームステイ先のおじいさんに頼んでやってもらったことが分かりました。また、サンタさんから手紙（英語で書かれたポストカード）が届いたこともあったけれど、それも、そのアメリカのおじいさんの仕事だったそうです。

サンタと電話で話したという事例は他にもありましたが、その例でもなぜかサンタが話すのは英語。サンタクロースは名前からして日本人らしくないので、話す言葉も日本語ではない英語ということでしょうか。サンタからくる手紙も英語が多いようです。子どものころにもらったサンタからの手紙、難しい英語らしきものが書いてあったが、大きくなってから読み返してみるとローマ字で書かれたものだったことわかって親の苦心がわかって笑えたというものもありました。

多くの子どもたちはサンタクロースの存在を信じているようですが、いつの頃からか、「サンタクロースってほんとうにいるの？」と疑い始めます。小学校も低学年ぐらいになると、子どもたち同士でほんとうにいるのか、意見が戦わされることもあるようです。そこで子どもたちは、ほんとうにいるのかどうか必死でその正体を確かめようと知恵を働かせます。

煙突がないのにどうして？

サンタクロースの存在を最初は素直に信じていました。うちのアパートにはえんとつが本当はない

のですが、遠くから見ると近くにある銭湯のえんとつと重なって、まるでアパートにえんとつがあるように見えるのでサンタクロースはそこからやってくるんだ、と思っていました。しかし、小1ぐらいになってくるとどうもおかしいことに気づきだしたのです。えんとつとうちはつながっていないぞ？と。そう、もし私のアパートにえんとつがついていたとしても家の中とえんとつはつながっていないので家に入ってこれる訳がないことに気づいてしまったのです。最初は窓からやってくるんだ、と思いました。しかし、いつも「かぎをかけなさい」と口をすっぱくして言われているので、クリスマスの日もかぎがしっかりかけてあるから入ってこれるはずがないのです。なんで、なんで、ナンデ？とかなりの間不思議に思っていました。そして「サンタクロースはいないんじゃないか。お母さん達なんじゃないか。」という仮説に達し、私は両親を試すことにしました。「サンタクロースはハンコを持っていて手紙の最後に押してくれる」というどの本にも載っていない私が勝手に作り上げた話を母だけにして、「サンタさんのハンコ楽しみだな♪」とちょっとした演技もしつつサンタクロースへの手紙を書いて枕元に置いて寝ました。翌朝、起きてみると枕元にはプレゼントと見たことのある字で書かれた手紙の返事がありました。手紙の最後にはもちろん赤のペンでかなり苦労して書いたと思われるハンコのあとも……。それを見て、「やっぱりサンタはいなかったんだ」と思いました。でも子どもなりに親の愛ゆえの行動だということは分かっていたのでそのことは言わず、「わあ～見て見てハンコがあるよ！」と喜んだふりをしました。せっかく一生懸命書いてくれたハンコを無駄にはしたくなかったし、親の愛に精一杯こたえてあげたかったので私は小5ぐらいまでサンタの存在を信じるフリをしていました。

サンタは煙突から入ってくるものですが、日本の家屋では本格的な煙突がある家は少ないのではないのでしょうか。「煙突がないのにどうして入ってこれるの？」はサンタに関する三大疑問の一つでもあります。サンタが入って来れるように、部屋の窓を開けて寝ようとして親に叱られたというのもありました。なかにはサンタはスモールライトで小さくなって家に入ってくると親に話されて、サンタはドラえもんや親戚なんだと信じこんでいた学生もいました。それにしても、サンタは親かどうか、子どもなりにここまで考えて確かめようとしている姿には感心させられるものがあります。サンタの存在を確かめるだけでなく、もっと積極的にサンタを捕まえようとした学生もいます。

サンタを捕まえる！ その1

私は小学校5年生の頃サンタさんが誰なのか、何者なのかということがすごく気になったので、いくつかの質問を書いた紙を枕元に置いて寝ました。質問の内容はこうでした。「なぜふゆにくるの？」「なぜとなかいにのってくるの？」質問に対する答えは「なつは あつくて はたらけない としじゃからな 雪道には となかいにかぎるわい」と書いてありました。そして名前の欄には「さんた くるす」性別はおとことおんなの中間に丸がうってありました。書いてある字はまちがいがなく母の字だったので、私は起きてすぐ「お母さんがサンタさんだったの」と聞いたのですが、母は「ちがうよ。」としか言いませんでした。そこで私はもっと確信が持てるように来年はサンタクロースを絶対につか

まえようと妹と計画を立てました。そして、まちにまったクリスマスイヴ。私と妹は部屋のドアに音のなるカウベルのようなものをつけ、私たちが寝ていてもサンタが来たことに気付くようにしておきました。そして、ドアを開けると出てくるガイコツ（白い紙を切って作ったもの）床にはサンタが足をひっかけて転ぶようにビニールロープをはりました。これで絶対サンタをつかまえられる！と安心して寝たのですが・・・作戦失敗。そんなに簡単にサンタはつかまえられませんでした。

サンタの性別なんて考えたことはありませんが、白いひげのおじいさんで普通に考えれば男のはず。ところが、男でも女でもないとなると謎は深まるばかりです。ついに考えだしたのはサンタ捕獲大作戦。次の事例は、集中講義にいった大学の男子学生が書いた思い出です。

サンタを捕まえる その2

1年目 床に小麦粉ばらまいて、サンタの足跡を採取。

2年目 1年目の結果によりサンタの存在を確認した上で、弟と交代で見張り。なお、この時動いたりしゃべったりはしない。気付かれると逃げられるから。生のサンタを見るだけ見て、そのサンタが本物かどうか、見極める。

3年目 過去の結果を元に、サンタの侵入経路を押さえ、その道中に罠をはる。

①廊下にワックス

②ドアを開けると上からバケツ

③プレゼントの袋の中にねずみ取りマット

しかる後に、弟とともに一斉にふとんごと取り押さえる。

という恐怖の三カ年計画を弟と立案しましたが、一つ目の小麦粉ばらまいた時点で親にさんざんしかられてこの計画は闇に葬られました。

毎年毎年ほくの欲しかったものをプレゼントしてくれたサンタクロース。なぜあなたはほくの欲しかったものを弟にあげるんですか。でも、あなたのプレゼントはうれしかった。弟にあげた方をくれていたならもっとうれしかっただろうけど。

計画が実行できなかったのはほんとに残念です。しかし、サンタを捕まえたら、そのあとそのサンタをどうするつもりだったのでしょうか。そこまでは考えていなかったということでしょうか。子どもたちの楽しみなプレゼント。いつも欲しいものが貰えるとは限らないようです。サンタのプレゼントはいつも学用品だったという学生もいます。それにしても、兄弟がいる場合は、他の兄弟姉妹が何をもらったかを、チェックしているのがおかしいです。朝起きると自分のプレゼントをチェックした後に、兄弟のプレゼントをチェックした思い出をもつ学生も多いようです。

やがて、子どもたちはサンタクロースの本当の姿を発見します。いつまでサンタクロースを信じていたかは、かなり幅があります。小学校低学年で早くもサンタの正体を見破っていた学生もいます。逆に高校生までその存在を心ひそかに確信していた学生もいます。

サンタクロースが親であることに気づいたきっかけは様々です。親から打ち明けられたり、プレゼントの隠し場所を兄弟で探し回り発見したり。

靴下にプレゼントをつめている父の姿が

小学校4年生まで信じていました。いろいろ、絵本（『サンタクロースってほんとにいるの』福音館書店）のような疑問をもって、よく両親に聞いていたのですが、両親の言葉を全然うたがわなかったのです。実際、母親が手編みでかなり大きなサイズの靴下をあんで用意してくれたり、父も煙突掃除をやってみせてくれました。クリスマスの朝、ずっと欲しかったものが届いたのを知って幼い弟とわたしが空まで届くようにと、ずーっと上を向いて大声で「サンタさんありがとうー！！」と大声で叫んだ記憶があります。でも、よく考えると「なんで私の欲しいもの、いつもわかるの？」という私の問いかけに父が、「お父さんの職場にサンタさんが来てくれて、一人一人アンケートをとるんだよ。あ、明日会うんだって、忘れるところだった・・・」とみえみえの嘘をついていたのを思い出し、両親もだますのに必死だったのだと、今となってはおかしく思い出されます。結局は、4年生のクリスマスイブの夜中、靴下にプレゼントをつめている父の姿を暗がりの中で発見してしまって、夢はくずれました。でも、今は実在しなくても、サンタクロースそのものの存在はずっと生きつづけてほしいと思います。

この事例のように、夜寝ないでサンタの正体を確かめようと目を閉じて待っていた思い出をもつ学生は多いようです。我が家の娘の場合も同じでした。小学校2年生のクリスマスの夜、娘が寝たと思って枕元にプレゼントを置いたところ、目を閉じて待っていた娘が、パッチリと目を開けて、「やっぱりお父さんとお母さんだ」と見破られてしまいました。

サンタの正体を知って、かなりショックを受けた学生もいるし、自然に受けとめた学生もいて、やはり、かなり個人差もあるようです。

もちろんサンタクロースの来ない家も多くあります。クリスマスには普通に親からプレゼントをもらっていた学生もいます。中にはまったくサンタクロースを知らなかった学生もいました。

サンタは日本人？！

我が家では、クリスマスはイエス様の誕生日だとしてしか教えてもらっていませんでした。私は保育園に入園するまでサンタクロースを知りませんでした。サンタさんの話で盛り上がる友達を横目に、私は（サンタとは何ぞや？）といろいろな想像していました。最初は“三太”という名前から察するにサンタは日本人に違いない！と勝手に思っていました。そして、友達の言葉から“三太”のイメージはどんどんふくらみました。「赤い服」から「赤い着物」を、「白くて長いヒゲ」から「仙人」を。ずいぶん不気味な“三太”が出来上がったので、私は皆がどうしてサンタを待ちこがれているのか分かりませんでした。しばらくして、サンタイコールプレゼントという公式を見つけたのですが、「知らない人から何かもらっちゃいけません」と言われていたので、サンタは自分には関係ないな、と思って

いました。だから、靴下をぶら下げるとかいうことはしなかったです。サンタを信じる、信じないと言う前にサンタに対してまったく興味がありませんでした。だいたい、“三太”の話を友達に話した段階で大笑いされたので、ひねくれてしまいました。親には、せめてサンタがどんな奴なのかぐらい、説明しておいてくれれば良かったのに！！と思っています。

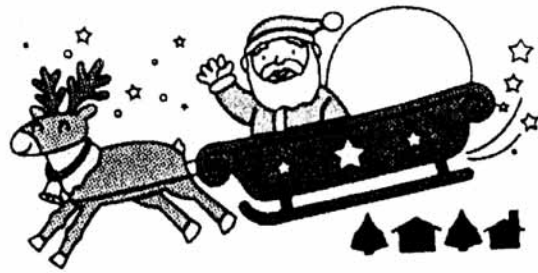
クリスマスやサンタロースは本来はキリスト教の行事です。宗教的な理由でクリスマスは一切関わりのない家庭もあるようです。保育園や幼稚園でもキリスト教系の園では、クリスマスは年間の最大行事です。どこの園でも聖歌隊や降誕劇に取り組み、サンタクロースも園にやってきます。公立の園では、やはり宗教的な配慮から、クリスマスでなく「年末子ども会」として取り組むところもあります。日本では、クリスマスはほとんど宗教的な意味がなくなっていると思います。世界的に見ると、キリスト教と関わりなくこれほどクリスマスが普及している国があるのでしょうか。また、キリスト教が背景にある場合とない場合では、子どもたちの前に登場するサンタクロースにどんなちがいがあのか、とても興味のあるところです。

実際にはこの世の中に存在しないサンタクロース。それがどうして、キリスト教国でもない21世紀の日本でこんなにも出現するのでしょうか。プレゼントも親から直接渡せばよいものをサンタクロースが渡すのはなぜでしょうか。そこには、サンタクロースが登場することによってしか味わえない独特の体験世界があります。サンタという謎の存在からプレゼントをもらうことで広がるワクワク・ドキドキの世界。今年は何をプレゼントにもらおうかな、どうやって欲しいものをサンタさんに知らせようか悩み、欲しいものがもらえるかどうかドキドキしながら、目を閉じて眠るイブの夜。サンタからのプレゼントを楽しみにしているわが子の姿が見たくて、毎年、あれこれ工夫してサンタになる親。やがて、サンタの存在を疑い始めると、親と子どもの知恵くらべが始まります。サンタの正体を見破ろうとする、子どもの執念と追求力には想像を超えるものがあります。こんな独特の世界は虚構の世界でしか体験できないものです。もしも本当にサンタクロースが実在していたら、こんな不気味な存在はないのではないのでしょうか。ちゃんと戸締まりがしてあるのに、夜に音もなく忍びこんでプレゼントを置いていく。一つ間違えたいへん危険で怖い存在です。実際にサンタがどこからか忍びこんでくると思うと怖くて眠れなかったという思い出を持つ学生もいました。

子どもの世界にはサンタクロース以外にも実際には存在しない不思議なものが日本の伝統行事の中にもたくさんあります。代表的なのが節分の鬼です。これも園によっては、かなり本格的な鬼が登場します。毎年、節分が近くなると鬼が怖くて保育園に行きたくなかったという思い出を語る学生もいます。本学のある地域の鳴海には、お祭りで「猩猩」という不思議な存在が出現します。天狗のような長い鼻と高下駄をはき、手には大きなうちわを持っています。地元出身の学生に聞くと、子どものころに「猩猩」に追いかけまわされてとても怖かった話をします。しかし、怖くて泣きじゃくる子どもたちの姿を見ている大人はなぜか楽しそうに笑っています。なぜ「鬼」や「猩猩」などの虚構の存在を作りあげて、子どもを恐怖の世界に落としいれるのか、そこにはサンタロースと共通の世界があるように思います。鬼が本当に存在して、子どもたちを追いかけまわしたら、こんな危険な話しはありませ

ん。それこそ子どもの生命に関わる危険です。虚構の世界だからこそ子どもは本気で怖い体験ができるのです。

なぜありもしない存在を大人たちは、子どもをだまして出現させるのか。そこには虚構の世界でしか子どもたちが体験できない「リアルな世界」があるからです。だから、大人たちは子どもたちをあえてだまし、本気にさせようとするのでしょう。そして、その体験世界は子どもにとって決して虚構の世界ではなく真実の世界なのです。



子どもたちは造形で何を表現するのか

名古屋短期大学 高田吉朗

私はこれまでに「図画工作」「美術」「造形」「表現」など教科の名称は様々ですが、保育園児、幼稚園児、小学生、それらを含めた子ども、中学生、高校生、美術大学予備校生、短大生、大学生、一般のおとななど様々な年代の人に教える機会に恵まれ、現在に至っています。10年ほど前に自宅で造形教室を始め現在も毎週数人の子どもたちが通ってきています。始めたきっかけは単純な動機でした。当時娘は小学校低学年でしたが、学校で描いてくる絵がどうもそれまでに家などで描いていたもの異なり伸び伸びしていない印象で、本人もあまり楽しくなさそうだったのです。そして夏休みになると「自然と緑」とか「防火ポスター」とかいったお決まりの課題をプリントの一覧表で示されてきたのでした。この状況は明らかに私が小学生だった頃とは異なり疑問をもっていました。

○市美術展幼少年の部

秋になって私の住む市でも芸術祭の中に美術展を位置づけ10月下旬から一般の部(日本画・彫塑工芸・洋画・デザイン・イラスト・書・写真)、11月上旬から青年の部(絵画・彫塑工芸・書道・デザイン・写真)、11月下旬から12月にかけて幼少年の部(絵画またはデザイン・書写①毛筆②硬筆)という部門で開催され55年以上の歴史を持っています。幼少年の部には保育園・幼稚園・小学校・中学校までが該当し、展示会場は所狭しと作品が展示され、子どもたちだけでなく家族連れで賑わいます。全ての作品を展示するには会場スペースの問題もあり各学校で既に絞られ、それらの作品を小学校部門は5～6名、保育園幼稚園部門と中学校部門は1名の審査員が時間をかけ1割程の推奨という賞が決定されます。この会場に入るや否や、まるで同じ作品が目飛び込んできたのです。テーマはさほど毎年変わらなく、小学校1年生は芋ほり・うんてい・バツタ・大玉転がし、2年生は芋ほり・鬼の雷・ザリガニ・クレーン車・シャボン玉、3年生はリコーダー演奏・シャボン玉、4年生はヘチマ取り・お話し絵、5年生は校内風景・神社風景・わらじ、6年生は自画像・電柱のある風景などでほぼ同じ作品がずらりと並ぶのです。ここには指導方法に困惑しマニュアル化した意欲のない指導者と、お手本通り表現させられ描く喜びを奪われた子どもたちの姿が露呈されていました。保育園や幼稚園ではそれほどでないにしても、小学校ではその傾向が強く、小学校高学年から中学校に至っては最も多感な時期であるにもかかわらず同じ作品が並んでいます。そしてこの傾向は他の市町村でもさほど変わりありません。今では全国にこの傾向が広まっているのです。



図1：ザリガニ(小2)



図2：芋ほり(小2)



図3：うんてい(小1)

これらの作品はどう見ても同じように見え、一見感動的に見えますが、どう描いたら感動的に見えるかが意図的に指導されたものです。上手い絵かといえば、皆上手すぎるくらいですが、だから問題なのです。上手すぎる絵は感動が無く問題です。しかも皆同じく上手ということは不自然でなりません。これらは酒井式描画法というもので指導された教育なのです。

酒井式描画法

酒井式描画法とは、元小学校教師の酒井臣吾(1934～)が生み出した絵画の描画指導法です。「酒井式描画指導法入門」(明治図書1989年)によれば、いい作品を生むためのシナリオと称して、その子なりの最高傑作を作らせることを目的とし、一名も残さずにクラス全員が「傑作」を作るための道筋を述べています。

酒井式の基本理念は以下のものです

- ・ふん切る…見切り発車の原則
- ・集中する…かたつむりの原則
- ・「良し」とする…後悔禁止の原則
- ・それを活かす…プラス転換の原則

ゆっくりと長い線を引くことは、しばしば導入のトレーニングで用いられ、じっくりと描くことには効果的であると考えられます。その他の理念に関しては、いかにもこの指導法が自主性を認め自由な方法であるかのように思われがちですが、実際には描く場所や順番が決められています。実際ほとんどのテーマで先ずは顔か手といった部分を描いた後でそれらをつなげるので、かえって腕が歪むことで伸び伸びした印象深い作品に仕上がります。着彩に関しても全般に薄塗りで、かつて「チマチマ派」と称された描写方法で、丁寧に観察して塗っている印象を与えますが、筆の勢いもなく、内面的な表現とはいいがたいのです。2005年に教育テレビの「わくわく授業」という番組で、この酒井式描画法を素晴らしい授業として取り上げたことで批判も含め全国への広まりにより一層拍車を掛けました。「これが幼児の絵!?魔法の酒井式描画法」(明治図書2005年)では埼玉県白鳥幼稚園での実践が示され、この方法が2歳児にまで行われていることが記されています。どの様な順序で描けば傑作ができるか懇切丁寧に示してあり、低学年向けの顔を描くシナリオでは画用紙の穴から顔を出させ

たり、鼻や口を実際に手で触らせたりして対象物を確認するなど授業内容は子どもとの対話なかで繰り返し広げられていく姿はむしろ肯定されるべきでしょう。「好きなように」「自由に」といって教えることを放棄している教師よりは、情熱を持って取り組んでいるといっただけでもよいかもしれません。しかし描く順序や構図や着彩方法まで細かく指示に従って描くとすると、同じような作品が並ぶ羽目になります。なるべく教えないで意欲的に自由に描かせるなどの抽象的な指導方法では、どうしてよいのか戸惑ってしまう教師にとっては打って付けの方式として好感をもって受け入れられ全国に広まりました。これは造形教育指導の曖昧さが露呈された結果で、指導に不安を抱く力不足の教師が多いことの証でもあるのです。現実には酒井式描画法のシナリオにおける熱心な子どもとの対話や対象物を観察することはそっちのけで、見本をただ示して描く順序だけを指導する方法に終始する教師がほとんどです。一名も残さずにクラス全員が「傑作」を作ると言い切ることに、この指導方法が広く伝わった優れた点と同時に非難すべき点が共存しています。教育においてましてや造形において、クラス全員が同じような作品で一律に「傑作」を作ることには、はたしてどれだけの意義があるといえるのでしょうか。クラスに出来る子も出来ない子もいる姿の方が自然であり、出来ない子は、ほかの分野が出来ることによって救われたり、逆に他の教科が苦手な子にとって図工や体育や音楽が出来てバランスが取れたりすることは大切なことです。造形教育の目的は決してクラスの中から将来プロの画家を目指す人材を生み出すことではありませんが、このような一律な指導の下では、才能に恵まれ絵が得意だとする子どもにとっても悲惨であることは言うまでもありません。

自宅の造形教室

こんな状況を知って何とかせねばと思い立って造形教室を開きました。大きさに言えば、この状況から子どもたちを救わなければという思いがあり、その中に我が子も含まれていたわけです。まずは夏休みに娘の同級生がたくさん参加しました。課題が出て家でどのように指導していいのかわからない保護者も多かったのでしょう。狭い我が家に20人以上の子どもがやって来ました。毎日午前中2時間で1週間続けて、作品を3点ほど仕上げます。ここは学校でないから自由に好きなように描けます。思い通りに描けない子は、それぞれテーマが異なってもそれぞれに応じて対応しました。狭い部屋にいろんな学校や学年の子どもが集まるのも楽しいし、学校のような評価もない。実はこの自由に好きなようにというのが実に難しい。造形教育で一番保障されなければいけない自由というのが、今までそうでなかったのが、戸惑ってしまうのです。「ここは何色でぬったらいいですか?」とか「どうやって描いたらいいですか?」というものから、どうしていいのかわからず戸惑う子もいました。しかし、周りの雰囲気徐徐に思い切って描く方向に導くのです。

始めは夏休みだけの造形教室でしたが、それがきっかけで毎週行うようになりました。夏休みは課題をこなして提出しなくてはならないので保護者の希望も多く、たくさんの子どもが集まったのですが、それ以外の日になると毎週土曜日などにしても子どもたちは塾やその他の習い事が忙しく10人程度からのスタートでした。造形教室に通うには勿論子ども本人の意思が大切ですが、最終的にやはり保護者の考え方で決定されます。とりあえず見学を希望してから決める人もいます。「うちの子は

絵がへたくそなので何とかしてやってください。」という保護者も少なくありませんが、そんなときっぱり「ここへ来て絵が上手くはなりませんよ。なぜならそれを目的としていませんから。それにだいたい上手い絵ってなんでしょうかね。そんな絵があるとしても、特に子どもの頃の表現にはそんなことは不必要でしょう。」って説明しますが解ってもらえないこともあります。「でも表現する喜びや楽しさを感じられるようになると思います。」と付け足します。

私は彫刻家であることもあって、絵を描くのと工作とをだいたい交互に行っています。工作は牛乳パックなどの廃材を使ったものや焼き物など様々です。

夏休みの思い出を描く

長い夏休みが終わって9月になるとまた通常の造形教室が始まります。この時期はそれぞれに楽しく過ごした夏の思い出を胸にして集まって来るのでこんなテーマはよくあります。子どもの絵はメッセージですから、そこから色々な話が聞こえてきます。家族との関わりや思いを描きながらいっぱい語ってくれます。

(1) A君(小1)の夏休みの思い出

普通はどこかへ出かけた様子を思い出して描くのが一般的ですがこの絵はずいぶんと変わっています。造形教室に通うようになって半年くらい経ち、やっと何とかここまで描けることができるようになりました。というのは、A君は落ち着きがなく、じっと座って描くことができず、周りの子の邪魔ばかりしている子です。粗雑な描き具合は、落ち着きの無さや技法の未熟さによるものです。太陽が画面に7つもあるのですからよほど暑い夏



を過ごしたといえるのでしょうが、それだけではないのです。絵に表れる子どもの心という絵画から心理を読み取る研究をしている浅利篤(注:1)によると太陽はお父さんの象徴ということです。こういった分析はあまり過信するのも問題で注意しなくてはならないのですが、そうなるこの絵から色々A君とお父さんの関係が見えてきます。他の子は造形教室にたいていお母さんが付き添ってくるのですが、A君はお父さんでした。そして「絵は好きなの?」という私の質問に「別に。」と言って、「お父さんが行けと言ったから来ただけ。」とここへ来た理由を説明してくれました。お父さんはとても躰に厳しい学校の先生です。A君も1年程通って、少しずつ描けるようになってきたのですが、突然お父さんがみえて「勉強ができないので塾に行かせます。それで忙しくなるのでやめさせます。」と言われ、教室を去っていきました。A君にとってお父さんはかなりの重荷でもあったように思いましたが、続けられなかったことがとても残念です。

(2) Iさん(小3)の夏休みの思い出

Iさんは近所の子で、とてもおとなしくて絵を描くのが大好きな女の子です。挨拶をしても返って

来ることはなく、返事も聞き取れないくらいの小さな声です。動物の絵が得意で黙々と描いていました。絵が上手かどうかということだけで見たら、明らかに小学校3年生で何も見ずにここまでイルカが描けるのなら上手いことになります。しかしそれではここから何も読み取れません。

この絵で分かるように家族で水族館に出かけてイルカショーを観たというのですが、この画面には男性が描かれていません。彼女は母子家庭でお姉さんとおばあちゃんがいます。家族でイルカショーを観ているのですから、こちらを向いているわけがありませんが、その表情を想像するのでしょうか。動きの無い整然とした家族の後姿や、周りの灰色の色調からも、あまり楽しそうな笑顔が想像できません。この中でIさん本人は、ほぼ中央の人物ということになりそうですが、私にはその横にぼつんと、しかしとても大切に置かれた小さなバッグが彼女自身のように感じてなりません。しばらくしてIさんは造形教室に来なくなりました。その後6年ほど経ちましたが、中学生になってもずっと登校拒否で自宅にいます。既にこの時にサインを出していたように思えてなりません。



(3) Wさん(小1)の夏休みの思い出

この絵はIさんのとは対照的に色調も明るく自分の嬉しい表情も描かれています。彼女は一人っ子で家族3人で海水浴に行きました。上手かどうかで見たら、小学校1年生でこんなに描けるのですから間違いなく上手い方に入用でしょう。何度も述べていますが、そのことは問題ではありません。自分が真ん中で笑っていて、その笑顔は両親に見守られているという安心感と幸福感にあふれています。



このお母さんは作品の褒め方も上手いのです。以前、造形教室で空き箱を使ってバッグを作ったことがありました。お迎えの時、お母さんは皆さん「じょうずね。」と子どもの作品を褒めるのですが、マンネリ化したこのせりふだけでは子どもは納得していないようです。ちゃんと作品を手にとってしっかり見てお話しをしてほしいのです。Wさんのお母さんは「じょうずね。」だけでなく「素敵なバックだから今度このバックを持って一緒にお出かけしようね。」と話しました。子どもが一番大好きなお母さんに作品を認められたいのです。しかも上手とかいう言葉でなく、自分が作った作品によって好きなお母さんとお出かける約束ができるのは、この上ない喜びに違いありません。このような家庭環境でWさんは育っているのだと絵からもつくづく感じるのです。

これらの事例から分かるように同じテーマで描いてもそれぞれ表現は様々です。酒井式描画法で描

かされていては、このように表現もできなくなるばかりか、その絵の裏側ともいえる深いところを読み取ることができません。そして、上手とか下手とかいう問題とはまったく関係ないということです。どんな気持ちでどんな風に描いたか、絵と向かい合ってみると子どもたちは様々な問題やストレスを抱えていることも少なくありません。心身ともに健康な絵を描く子どもが増えてほしいものです。

のびのび表現できる環境

私は、小さい頃から絵を描いたり粘土でものを造ったりすることが好きでしたが、誰かに習ったというわけでもありません。ただ絵を描きたいと思えばいつでも描けるよう紙とクレパスが身近にあり、粘土箱も引き出しにありました。これは母親がそういう環境を自然なかたちでつくってくれていたと今になって思います。紙といっても新聞に入っているチラシ広告の裏が白いものを束ねてあっただけで粗末なものです。しかし、だから失敗を気にせず伸び伸び描けたでしょうし、様々な紙の質感の違いとクレパスの乗りの微妙な感覚も知ることができました。あまり社交的でなく、むしろ独りで時間を過ごすのが好きでしたから、一日中、絵を描いていたり土を触っていたり虫と話をしていたりしていました。3つちがいの兄が通っていたことから、私も小学校1年生になって絵の教室に入りました。その先生は示現会(注：2)の画家で、こういうものを描きなさいとか一切言われないうのです。その意味では何も教えてはもらえなかったのかもしれないのですが、それが良かったようです。でもたくさんのお話を自然なかたちで学ぶことができました。教室は先生のアトリエだったので、そこには見たこともない大きな油絵の具のチューブが転がっていたり、刷毛のように太い筆が何本も立ててあったり、100号以上の巨大なキャンバスが重なり、ペンティングオイルの匂いが漂って、何とも魅力的な空間だったのです。そこで毎週描いて持って帰ると、母親が部屋の壁に画鋏で貼ってくれたのです。そして家ではその絵について饒舌に語っていました。その壁だけは自分の領域であるかのようにいつも新作が展示されるギャラリーと化していました。

子どもの絵は上手であってはいけません。上手とか下手という判断だけではその奥に潜んでいる子どもの心の状態を見逃してしまうかもしれません。周りの大人は子どもの絵からどんな言葉が聞こえるか真剣に耳を傾けましょう。展覧会などで受賞することは、確かに励みになるかもしれませんが、そればかりを気にして描くのも良いこととはいえません。受賞できなくても表現する喜びを第一に考えることの方が重要です。そして適切な褒め言葉と作り出す環境が整っていれば子どもは自然に伸び伸びと表現する喜びを体感するはずです。

注：1 浅利篤(1912～1999年)多くの事例研究から浅利式児童画診断法を確立した。

診断は「形態標識」「構図標識」「色彩標識」という診断標識を照らし合わせるによって行う。「形態標識」(シンボル)では太陽は父親をあらわすシンボルとし、太陽の色、位置、形、後光の形にまでそれぞれ意味があることを示している。

注：2 示現会 日展系の公募団体。昭和22年10月洋画団体示現会を結成し、翌年の昭和23年に第1回示現会展を開催。以降毎年公募展を開催。

地域の社会資源を活用した子育て支援の実践的試み ～ショッピングセンターでの学生による企画・催しを通して～

名古屋短期大学 吉見昌弘

1. 問題の背景と目的

地域で暮らす子どもを持つ親や保護者の子育てを支援する施設としては保育所や地域子育て支援センター、児童館、幼稚園などの児童福祉施設や教育機関などが挙げられる。政府の施策による地域の子育て支援の多くは、こうした施設を拠点とした子育て支援を展開することが定番のスタイルになっている。

ここであらためて「子育て支援とは何か」を問いかけた時、子育て支援とは子どもを取り巻くさまざまな環境（地域）を活用しながら親子を含めた家族をまるごととらえて支えていくのが本来の姿ではないかと考える。たとえば、吉田眞理氏によれば、子育て支援について「生まれてくる子どもの存在を在るがままに受けとめて家族ごと支えていくことから始まる」⁽¹⁾と述べている。さらに同氏は「子育て支援事業に参加した親子をお客さんとして扱い、一方的に楽しみを与えたまま終わらせず、子どもの育つ近隣の環境について考えるように働きかけることにより…住民同士が気遣いあうような豊かな近隣関係を作っていく」⁽²⁾ことが大切であるとして、地域社会における近隣関係づくりに力点を置いた子育て支援のあり方を提案している。

その観点からすれば、子育て支援の本来の形は、特定の施設に限定せず、ごく身近な地域の生活の場でも実践できるのではないだろうか。その方が、地域の中で潜在的に支援を必要とする親子へ支援へとつながるのではないだろうか。そう考えた結果、身近な地域の子育て支援の場として、親子の生活圏に位置するショッピングセンターを利用して子育て支援が展開できないかと考えた。ショッピングセンターは日々の買い物場であると同時に人々が行き交う交流の場でもある。利用者は、高齢者や若い世代、そして子どもとその保護者など幅広い年齢層が気軽に利用しているのが現状である。

ところで、2002（平成14）年には、保育士養成課程における新たな科目として「家族援助論」が必修科目として位置づけられた。これは子育て支援を家族の問題としてとらえ、子どもへの支援と同時に親を含めた家族への支援を保育士としての重要な役割と位置づけていることを示している。しかし、保育士養成施設において、保育所などへの実習の際、子どもへの関わりは通常2～3週間の実習の中でそれなりに身につけていくものの、親子の関わりや保護者対保育者との関わりについては、既定の実習ではなかなか学ぶ機会も無いのが現状である。さらに、保育士養成施設で学ぶほとんどの学生は子育ての経験の無いことから、保護者の育児不安や子育ての悩みなどに実感をもつことは難しく、子育て中の親に共感し、親への自然な接し方を学ぶことは大変困難かつ重要な課題となっている。

そこで、本研究では、子育て支援の実践的試みとして、身近な場所であるショッピングセンターを活用して、学生による子育て支援の企画・催しを通して下記の事項について検討することを本研究の目的とする。

- ① 子育て支援の実践的な展開の場としてショッピングセンターはどのような意味や効果、問題点があるのか。
- ② ショッピングセンターでの企画、催しの実践を経験することによって、将来保育者を目指す学生にとって、どのような学習効果が期待できるのか。

以上の点について検討した上で、今後の子育て支援の課題について明らかにしていきたい。

2. 研究方法

名古屋短期大学で保育を学ぶ学生が中心となり、イオン有松ショッピングセンター内において絵本の読み聞かせ活動や来訪する親子が参加できる催しを企画、展開する中で、保護者や子どもとの関わりを通して、参与観察を行いながら検討していく。

主な対象者と実践者、場所等は下記の通りである。

<対象者> 0歳から6歳までの乳幼児とその保護者（一部小学校低学年児童を含む）

<企画・実践者>

名古屋短期大学保育科2年生及び専攻科の学生と教員

（実際にはゼミの学生等約20名程度が中心になって企画・運営する）

<実施場所>

イオン有松ショッピングセンター施設内（本学から徒歩15分程度に位置する）

〒458-0824 愛知県名古屋市緑区鳴海町字有松裏200番地 イオンリテール(株)

<実施日時>

平成21年12月～翌年1月、火曜の夕方4時以降もしくは土曜午後に4回程度、親子参加の企画を試行的に実施する。平日の時間を午後4時開始としたのは、多くの保護者が保育園、幼稚園を終えて、夕食の買い物のためにショッピングセンターへ来訪する時刻ではないかと推測したからである。

当初の案としては下記の実施方法・配慮を提案した。

<実施方法・配慮(案)>

- ① ショッピングセンター内（たとえば、書店の絵本コーナーなど）で、絵本の読み聞かせを実施する。他の企画としては、工作教室や演奏会、人形劇、紙芝居、スタンプラリー、ウォークラリーゲームなどが考えられる。
- ② 絵本を通して絵本への興味・関心を高めると同時に子ども達との交流を図る。
- ③ 参加する保護者とその子ども達に適宜、聞き取り調査やアンケート調査を実施することで効果の検証と必要なニーズを収集する。

④参加者への呼びかけや宣伝の際には、名古屋短期大学附属幼稚園や保育子育て研究所の交流会や近隣の幼稚園、保育所などへ協力を依頼する。

⑤学生にはできるだけ子どものみでなく、保護者の方との関わりをもつように指導をする。

備考：実施場所は現地調査の実施後、候補を挙げていく。企画の内容についてもいくつかの候補を検討し、12月から来年1月まで試行的に実践していく。単なる子ども達の遊び場や催し物とするのではなく、学生と保護者が触れ合う場と同時に立ち寄った人からも活動の様子が分かる場となるよう配慮をする。

10月の段階でイオン有松ショッピングセンターの管理者の方と相談し、学生の活動の主旨と内容について説明を行った結果、了承を得ることとなった。その後、支援活動の場所として、当初は書店の前での絵本の読み聞かせの活動を計画していたが、場所が狭いこともあり、最終的には、催し物がよく行われる2階の「自由通路イベント会場」を利用することとした。この通路は、通勤の人が歩いたり買い物客が往来する場所であり、「気軽に井戸端会議」のできそうな場所であると判断した。



Fig. 1 自由通路イベント会場

その後の具体的な活動の企画については、専攻科の学生1名が中心となって原案を作成してもらった。それをもとに宣伝用のチラシを作成し、名古屋短期大学附属幼稚園の保護者や保育子育て研究所の交流会に参加する親子、近隣の保育園に配布を依頼して宣伝をおこなった。

当日の展開においては、専攻科の学生1名に加えて短大2年生の保育総合演習（以下ゼミとする）における筆者のゼミ生16名に協力を依頼し、学生主体で企画、実践活動をおこなった。

予定された主な企画と日程は下記の通りである。各テーマを主活動とし、子どもと保護者が集まる前半には「アートバルーン作り」などのお楽しみ企画をそれぞれ入れ込むなどの工夫を行った。

- | | | | |
|-----|----------------|-----------|---|
| 第1回 | 平成21年12月 8日（火） | 午後4時～午後5時 | テーマ 「おいしそう！たべものの絵本読み聞かせ」※前半は「アートバルーン作り」 |
| 第2回 | 平成21年12月19日（土） | 午後2時～3時 | テーマ 「ミニ☆クリスマス会！」※前半は「マラカス作り」 |
| 第3回 | 平成22年 1月19日（火） | 午後4時～午後5時 | テーマ 「GO!GO! のりもの大好き」※「乗り物工作」 |
| 第4回 | 平成22年 1月26日（火） | 午後4時～午後5時 | テーマ 「びっくり☆どきどき♪しかけ絵本」※「ポップアップカード作り」 |

3. 子育て支援の展開と学生の感想からの考察

(1) 第1回 平成21年12月8日(火) 午後4時～5時

テーマ 「おいしそう！たべものの絵本読み聞かせ」

○子育て支援の展開

実施30分ほど前に到着し、会場の設営の作業に入った。長机と折りたたみの椅子を借りることができたため、最初は、「アートバルーン作り」と「絵本の読み聞かせ」で異なる椅子の配置をしようかと学生達は考えていた。しかし、親子が座ってから配置を異動させることは難しいと判断し、前方に長机を用意し、後方に椅子のみを配置することで絵本の読み聞かせがしやすいように配慮した。

アートバルーン作りは、あらかじめゼミの学生に練習をしてもらい、犬やライオンの他、花や剣など何種類かを作ることができるようにした。定刻の時間少し前になるとチラシの宣伝効果のためか周囲から親子が自然と集まり、アートバルーン作りが展開された。学生は親子と対面しながら何を作りたいのか子どもに聞きながら希望するバルーンを作っていた。

その間に保護者に対しては簡単なアンケートを配布し、来訪した目的やどのようにしてこの企画を知ったのか等、アンケート調査を行った。

後半になると、専攻科の学生による絵本の読み聞かせを実施する。親子の前で、たべものの絵本がいくつか紹介され、およそ予定通りに終了した。アンケート回答者は17名であり、実質的には20組ほどの親子がこの企画に参加して楽しんでもらった。



Fig. 2 たべものの絵本の読み聞かせ

○学生の感想からの考察

企画の展開後に、参加した学生に簡単な感想を書いてもらったところ下記のような回答を得た。「初めての実践で、どうなるか不安でいっぱいでした。」「最初、あんなに来て下さるとは思わなくて戸惑い、実際に子どもの前で作るとなると緊張しました。」「バルーンアートをやってみて子どもたちの喜んでいる顔が印象的でした。」「子どもたちは作るものと色にもこだわっていると思いました。」などと初めての子育て支援の実践に不安と戸惑う一方で、子ども達との関わりを通して、子どもへの思いを感じ取ることができたようである。

さらに保護者や親との関わりについては、「私は、次々集まってくる親子に話し掛けて、輪に入るのに戸惑っている方に目を向けるように心掛けました。」「保護者の方とは緊張しましたが子どもの話になると大学で学んでいるせいか通じるものがあり、とても気軽に話す事ができました。」「保護者の方の悩みだったのに解決策が全く分からずアドバイス出来ずに終わってしまったことに申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。」と感想を述べている。

保護者との関わりに戸惑いながらも上手く話しかけることができたり、できなかったりといった中

で、自分達が将来、保育者として保護者にどのように関わっていけば良いのかを知るきっかけになったようである。

(2) 第2回 平成21年12月19日(土) 午後2時～3時
テーマ 「ミニクリスマス会」

○子育て支援の展開

今回の企画は、平日ではなく、ミニクリスマス会ということで土曜日に展開することにした。平日と異なりどのような親子が来訪するのかを調べる意図もあった。前回と同じように開始30分前には来訪し、会場のセッティングを開始する。今回は、前半は紙コップと鈴を組み合わせたベル作りを親子であるために椅子と長机を組み合わせて工作がしやすいようにする。前は平日に実施したため、母親と幼児の組み合わせが多かったが、今回は土曜日の午後に実施したため、父親と子どもや夫婦と子どもの組み合わせで来ている者が多く見られた。



Fig. 3 ミニクリスマス会の開催

前半のハンドベル作りを親子で楽しんだ後、後半は、クリスマスソングとハンドベルの演奏を実施する。学生は趣向を凝らそうと大学祭で着ていたクマの着ぐるみを着て、楽しそうに演奏し、たくさんの拍手をもらい盛況であった。

○学生の感想からの考察

「歌やハンドベル演奏のときには、子どもたちが自分で作ったベルを鳴らして聞いてくれたので嬉しかったです。」「ハンドベルは今まであまりやったことなかったけれどすごく楽しめてまた機会があればやりたいと思いました。」「子どもたちや親御さんたちの楽しそうな笑顔を見れて、こちらまで幸せな気分になりました。」など自分達で工夫しながら親子で楽しめる企画をすることの大切さを学ぶと同時に、単に演奏してもてなすのではなく、子どもや保護者と一緒になって合唱を楽しむことの大切さを学んだと思われる。

また、「今回はお父さんたちが多くて驚いたけれど、親子で楽しんでくれていた様子だったので良かったです。」「今回のイベントはお父さんの姿も多くみられました。」「前回の催しに来て下さった人の中で今回も参加して下さった人もいたり、母親だけでなく父親の姿も見られたりしました。」「実習では父親と話す機会はなかったので、良い経験になりました。」などの感想から父親との関わり方を学ぶことも子育て支援には大切であると感じ、それと同時に父親に参加してもらうためには土曜日に催しを企画することは大切なポイントであることが示唆された。さらに、「子どもと一緒に折り紙を折っていきながらも保護者の方にも教えていくという雰囲気だったので、言葉遣いなど迷いながら関

わかりました。」など、子どもと同時に保護者と関わるのが難しい点にも気づいている。

なお、アンケート回答者は15名であったが、回答者以外を含めると20組ほどの参加者であった。

(3) 第3回 平成22年1月19日(火) 午後4時～5時

テーマ 「GO!GO! のりもの大好き」

○子育て支援の展開

今回は、「乗り物」をテーマにした企画であり、前半の製作活動である手作り車をどのようなものにするか苦労した。専攻科の学生と筆者が相談した結果、厚紙の円筒の中に石ころと輪ゴムを入れて転がすと戻ってくる仕組みの手押し車のおもちゃ作りを実施した。おもちゃ作りについては、仕組みが難しいこともあり、作り方と指導方法に改善が必要だと感じられた。また、10組程度の来訪者であったが、一組の親子に対して学生が1名～2名ほどで作り方を説明することで、より親密に親子と関わる事ができた。



Fig. 4 学生と親子でおもちゃ作り

○学生の感想からの考察

「今回のイベントが今までで一番保護者と関わる事ができたと思います。」「イオン有松の企画に3回参加してみて、だんだん親子と話すのに慣れてきたことに気が付きました。」「実習で自ら保護者の方に話しかけたりする事はあまりなかったのですが、催しを通して少しずつ自分から関わる事ができたと思います。」「今までと比べて保護者の方への言葉掛けが一番多くできたと思います。」と感想を述べている。わずか3回の実践でありながら、保護者への対応について、学生自身が自信を持てるようになってきたこと。具体的な言葉がけができるようになったことが伺われた。

また、「1歳くらいの女の子とお母さんとお父さんとおばあちゃんでお掛けに来ていた家族とお話をしました。」とあるように母親だけでなく父親や祖父母との関係についても学ぶ機会があることも学生にとって大切であると感じられた。「今回は、準備中や製作中にお年寄りの方が、何をしているのか気になって学生に話しかけてくる場面がありました。」とあるように親子の催し者に対して、地域の人たちの中には関心をもつ者もいることが分かった。

(4) 第4回 平成22年1月26日(火) 午後4時～5時

テーマ 「びっくり☆どきどき♪しかけ絵本」(テーマは変更有り)

○子育て支援の展開

今回の活動においては、今まで参加していたゼミ学生が授業のため参加できず、代わりに専攻科の学生3名で実施することになった。前半の製作活動においては、学生からの提案で、開くとポップアッ

プの動物カードが出てくるメダル作りにチャレンジすることになった。学生スタッフが3名のため会場の設営に時間を費やしたが、実際の展開においては、事前の材料や作り方の説明の準備を周到におこなっており、スムーズに進行していった。

さらに、絵本の読み聞かせでは、学生が選んださまざまなしかけ絵本に歓声を挙げて驚くなど読み聞かせをみんなで楽しむ光景がみられた。

○学生の感想からの考察

「今回の製作のメダル作りでは、金色の折り紙の裏から絵を描くと絵が浮き出ることに、とても興味を持ってきていたようだったし、作り方も分かりやすかったからか、子どもも大人も、楽しめていたようだった。」と前回の製作が難しかったことの反省から、今回は学生が、作り方や材料の用意に工夫をして、分かりやすく、興味を示しやすいような配慮をしていた。

また、「催し中の親の姿を思い返して見ると、子どもの制作を手伝いながら知り合いと会話をする、偶然通りかかった知り合いと挨拶を交わす、主に子どもと会話をして制作をするなど、様々だった。」「毎回参加してくれていた親子のことも思うと、子育て支援は継続して行うことに意味があると感じた。」とあるように地域の人との関わりが自然に行われるショッピングセンターで継続して子育て支援が実施されることが大切と認識したようである。

4. まとめと今後の課題

ショッピングセンターにおける学生の企画・催しを通した子育て支援の試行的な実践の結果をまとめるとおよそ次のことが明らかにされた。

第一は、従来、子育て支援の展開する場所と位置づけられてきた保育所や児童館以外にもショッピングセンターで子育て支援を展開することは工夫の仕方によって充分可能であることが分かった。机や椅子、そしてちょっとした材料を用意するだけでも1、2時間程度なら親子の興味を引きつけ、井戸端会議のようにおしゃべりを楽しむことは可能である。

第二は、子育て支援の対象として、母親のみでなく、父親や祖父母などとの関わりを支援していくことも可能であることが分かった。土曜日など、実施の日程を工夫することで父親の参加も充分可能であり、母親のみで子育てを担うのではなく、家族ぐるみで子育てを支援していくためには父親などが参加しやすい工夫をすることが大切であると思われる。

第三は、学生による子育て支援においては、保護者と直接、関わることの重要性が認識された。最初は保護者に対してどのような会話をしたら良いのか戸惑っていた学生達も、2回、3回の実践を通して、自分なりに工夫しながら保護者とのコミュニケーションを楽しむことができるようになったと思われる。子育て支援においては、保護者との信頼関係が非常に重要であり、その関係を学ぶ端緒としてこうした活動は意義のあるものと思われる。

第四は、子育て支援を実際に企画、展開することで学生一人一人が自信をもって子育て支援に取り組むことができる可能性が示唆された。このことは将来、保育所や幼稚園において学生自身が子育て

支援を展開する上でとても役に立つ経験であり、実践を通して学んでいくことの大切さが示唆されたといえよう。

さらに今後の課題となる問題点は以下の通りである。

第一の問題点は、学生による教材開発と指導法を工夫する必要があることである。活動においては、どの年齢の子ども達が何組来訪するのか予測がつきにくいこともあるが、提示した製作活動が年齢によっては難しかったり、企画の段階でもなかなかアイデアが出てこなかったりした。今後は、ゼミ活動の時間などを利用して、さまざまな年齢に対応した保育教材と指導法の工夫をしていくことが必要と考えられる。

第二の問題点は、ショッピングセンターという場では、子育て支援に参加する親子と支援する者を囲うことで落ち着いた雰囲気を作ることが難しいことである。ショッピングセンターというオープンな場での支援をするにあたって、誰でも気軽に立ち寄れる点は評価しつつも、時には周囲の目が気になったり、子どもが飽きた時にすぐに出て行ってしまうなどのデメリットもある。

今後は、ショッピングセンターでも場所と配置をさらに工夫することで落ち着いた雰囲気を作り出せる工夫をしていくことが求められよう。

第三の問題点は、事前に学生が保護者と関わるコミュニケーションの能力を高めていく必要があることである。今回の企画の実施においては、事前に学生に対して積極的に子どもに加えて保護者と関わり、お話をすることを求めてきた。しかし、具体的な話し方やアプローチの方法については充分指導することはできなかった。今後、こうした保護者とのコミュニケーションの能力を高めるための指導方法の工夫が必要であると思われる。

また、4回の実践活動を通して感じたことは、自由通路で催し物が始まると、男女を問わず高齢者の方や中年の女性などが学生や親子の様子を遠巻きに眺めたり、中には何をしているのかとすぐ近くまで来る者もよく見られた。この空間（自由通路）では通勤途中の人や買い物客などさまざまな人が自由に往来する場である。こうした普段、子育てに関係していない人にも地域に住む親子の存在に、関心をもってもらうという意味でも、ショッピングセンターで子育て支援を展開することは意義のあることだと思われる。

子育て支援は地域でおこなうものであり、その活動場所は子どもや保護者の生活の場の中に、子育て支援者（保育者を含む）が自ら出向き、さまざまな機会を利用して積極的に支援することも、時には大切ではないだろうか。支援の場は、ショッピングセンター以外にも公園やレストラン、銀行や病院などあらゆる施設、場所が想定されよう。また、今回は催しの企画のみであったが、情報提供や相談活動なども地域に密着した子育て支援には必要な要素と考えられる。

子育て支援の多様性と広がり認識しつつ、保育者を養成する大学として子育て支援の実践力をいかに学生に指導すべきか模索していくことが自分自身の今後の課題である。

引用・参考文献

- (1) 吉田真理『近隣社会からのアプローチ 子育て支援って何ですか?』新風舎 p.3 2004年
- (2) 同上 p.46
吉田真理『近隣社会からのアプローチ2 住民参加ってどんなこと?』新風舎 2005年

小規模園の良さを生かして - 障がい児も共に -

阿久比町立城山保育園 杉野葉子

はじめに

城山保育園は、知多半島の中央に位置する阿久比町の小高い丘の上にある定員60名の小さな保育園です。竹林に囲まれた広い園庭と平屋の鉄筋コンクリート造りの園舎で、現在9名の障がい児を含む0歳～6歳までの44名の園児と、11名の職員が楽しく一緒に過ごしています。障がい児の指定園でもないのにその比率が高いのは、町内に療育の施設がないことと、4年前たまたま保育した障がいをもつ子の生活ぶりから、障がい児やその保護者にとって居心地の良い保育園ということで地域外からの入園者がふえてきたことによります。職員間や保護者との連携がとりやすい早延長のない小規模園という条件を生かした結果ではないかと思います。全園児40数名の保育園では、日々の生活そのものが異年齢児との触れ合いの中で営まれています。顔や名前はもちろんのこと互いの個性も知り尽くし、違いを自然に受け入れて一緒に生活することが当たり前の日常となっています。そんな城山保育園ならではの楽しい園生活の一部を紹介したいと思います。

〈散歩・地域の方とのふれあい〉

天気の良い日、クラスの予定に合わせ誘い合って散歩に出かけます。少人数なので長い行列になることもなく、一人の発見を立ち止まりみんなで共有することができます。道中は地域の人との触れ合いの場でもあり、畑の収穫物をいただいたり、菜の花畑やレンゲ畑、コスモス畑で遊ばせてもらったりしています。また、キウイ狩やみかん狩り、栗拾いや柿とりをさせていただいたり、カブトムシ・クワガタムシ・メダカを園に届けてくれたりと、たくさんの地域の方たちに応援を頂き見守られていることを実感しています。

〈よしまき・おこしものづくり〉

どちらも地域の伝統食ですが、今は手作りする家庭は少なくなってきました。よしまきは端午の節句の頃、米粉の団子をよしの葉でつつんで蒸したものです。小さい子も一緒に田んぼや池のふちの土手によしの葉をとりに行き、熱湯で練った米粉で団子を作ります。よしの葉の芯に団子を刺してくるみ、細く裂いたシュロの葉で縛るのは年長児の仕事。蒸しあがったよし



まきをみんなでテラスに座ってフーフーしながら食べます。ほのかに甘い素朴な味を、楽しい保育園生活と共に心に残しておいてほしいものです。降園時にはレシピと共にお母さん達にも食べてもらっています。おこし物は桃の節句に、練った米粉をいろいろな形の木型で型抜きし食紅で色をつけて蒸し上げます。

よしまきもおこしものも、出来上がると近所のお世話になった方に届けここでもふれあいを楽しんでいます。

〈カモの放流〉

合鴨農法をしている保護者の田んぼでカモの放流をさせてもらい、ついでに田んぼに入って泥んこになってカモをおいかけて。保育士も一緒に大はしゃぎ。なかなかできない体験です。放流後少したつと蛍の季節となり「カモはどこで寝てるかな？」と親子で蛍観賞を楽しむ姿が見られます。



〈栽培と収穫〉

園の敷地には畑があり、近くに住むご夫婦に立派ないちごハウスを作ってもらったり、野菜作りなどの指導と援助を受け、じゃがいも・夏野菜・さつまいも・枝豆・落花生・そら豆などを育てています。町立保育園はセンター給食ですが、担当の栄養士さんの配慮で夏野菜などの収穫物は給食センターで調理してもらえます。

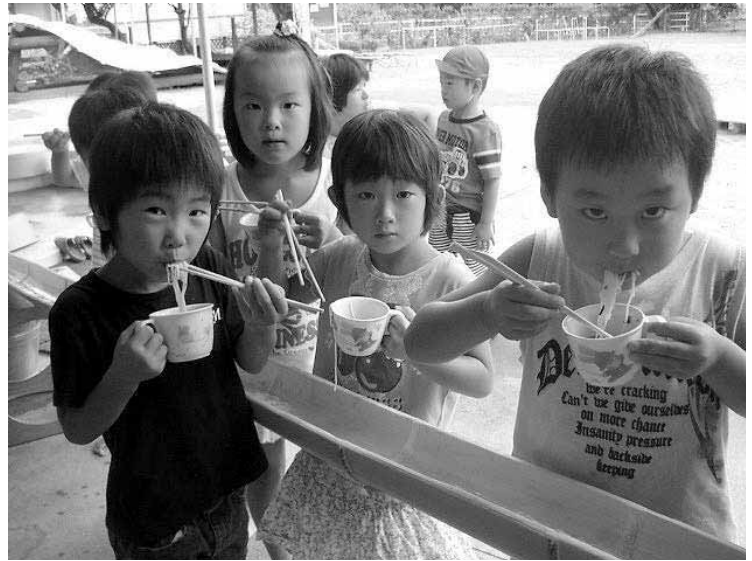
また、枇杷・うめ・木いちご・ぐみ・もも・柿・夏ミカンなど実のなる木がたくさんあり生長と収穫を楽しんでいます。

毎年数キロの収穫がある梅は梅ジュースにして七夕祭りに来園した方々に飲んでいただいています。



〈流しそうめん〉

夏、給食センターの休みに合わせ流しそうめんを楽しみます。テラスに長い青竹を置き箸がうまく使えない小さい子どもフォークですくって挑戦です。食べることの喜びや楽しさを最大限に味わえる楽しい行事です。この楽しさを1回で終わってはもったいないと、後日ミニゼリーすくいや巨峰すくいも楽しんでいます。



〈老人や障がい者とのふれあい〉

年に2回、地域の老人保健施設を訪問し歌や踊り、太鼓を披露して交流をしています。元気な自分たちの祖父母とは違い、車いすに乗ったり介助を受けたりしながら園児の手を握りしめ、涙を流して喜んでくれるお年寄りとの触れ合いは貴重な体験の場となっています。

また、昨年より地域にある知的障害者施設との交流も始まりました。入所者や職員と一緒にさつまいもの苗植えや芋掘りをしながら、園児たちは一人ひとり姿や形が違うのと同様にいろいろな人がいるということをごく自然に受け入れているようでした。これもまた貴重な体験の場として大切にしていきたいと思っています。

〈運動会〉

オープニングは恒例の全園児参加の荒馬。年齢に応じたそれぞれの動きを組み合わせながら、軽快な笛と太鼓の音に合わせて「らっせっら〜」のかけ声とともに園庭を元気に駆け回ります。

年長児の竹馬パレード。ダウン症のAちゃんはプラカードをかけ、担当保育士と手をつないでパレードを先導しました。障がいのある子どもその子なりの参加の仕方を工夫し、年中・年長児・職員・小学生・保護者参加のリレーや、来賓者も含め全員参加のフォークダンスなど誰もが脚光を浴びることのできる、小さい園ならではのゆったりとした運動会です。

〈和太鼓〉

阿久比町の町立保育園では以前より年長組の活動として和太鼓を取り入れており、城山保育園では8年前より三宅島太鼓に取り組んでいます。重心を移動しながら横打ちで太鼓を打つカッコよさは、小さいクラスの子にとってはあこがれの姿で、年長になったら太鼓を打つという大きな期待と



なっています。運動会が終わる10月中旬頃より練習を始め、12月の生活発表会と卒園式で披露しています。卒園してからも地域の夏祭りや町の福祉まつりなどへの出演依頼があり、城山保育園卒園児として演奏の機会をいただいています。園で行う練習日には1年生から6年生まで数十人の卒園児が集まって同窓会のような光景です。「どんつく どんつく」というリズムは、楽しかった園生活と共に子ども達の心にいつまでも残ることでしょう。

〈生活発表会〉

各クラスで表現遊びを行います。園児の人数が少ないため園長の私にも毎年どこかのクラスから出演依頼があり、去年は給食センターのおじさん、今年には忍者の親分役で仲間に入れてもらいました。日頃から各クラスの表現遊びを互いに見合っているため、みんながどのクラスのものも覚えてしまい、発表会後は乳児から年長児まで入り混ざって役を代わりあい見事に演じて楽しんでいます。



〈もちつき・鏡開き〉

暮れにはもちつき会をし、年が明けたら鏡開き。園庭の釜であずきを炊き、年長児が七輪で餅を焼き、その様子を小さいクラスの子が興味津々で眺めています。お迎えの時にお椀と箸を持参のお母さん達にもふるまいます。



〈カレーパーティー〉

卒園を前に年長児がカレーを作り、小さいクラスの子や保護者、お世話になった地域の方々を招待してカレーパーティーを開きます。手作りの招待状を届け、近くのスーパーに買い物に行き、栄養士さんと一緒に作ります。お世話になった人たちに、感謝の気持ちを込めて自分たちの手で作ったカレーを食べてもらおう。年長児はもちろんのこと、ごちそうしてもらった小さいクラスの子も保護者も、招待のお客様も職員も大満足。保育園での食育の総仕上げです。



〈保護者支援〉

職員室の前の廊下に保護者向けの貸出用本のコーナーが作ってあります。障がい理解の本、うつ病に関する本、食育や子育てに関する本など一般のお母さんが読みやすい本が置いてあり、貸出ノートから不安や悩みを持つお母さんに気付かされることもあります。また、このコーナーで本を探しているお母さんは私たちに声をかけてもらえるのを待っているということもわかりました。

小規模園では園児一人ひとりの家庭状況やお母さんの心身の状態などが把握しやすく、日頃から支援の必要なお母さんに気付いたら職員間で連携をとって対応するように心がけていますが、それでもまだまだ気付いていないことがたくさんあるということを再認識しています。

おわりに

城山保育園ならではの楽しい園生活の様子を紹介してきましたが、その一つひとつを振り返ってみると、小さな園だからこそ可能というものがたくさんあることに改めて気付かされました。3年前の春、小学校の卒業式を終えた卒園児16名が母親と共に園を訪れ、園生活を懐かしみながら一緒に植えた記念樹の前で写真を撮りました。中学3年生になった今年、卒業前の「幼稚園・保育園清掃ボランティア」で全員が来園し、ガラス拭きなどの後で園児と一緒におやつを食べながら思い出話に花を咲かせました。3年前、「いつかおばあちゃんになってこの保育園に来られるといいね!」と、母親たちが夢を語っていましたが、少子化と園舎の老朽化により、城山保育園を含む同学区内の町立3園が早ければ3年後には統合されることが決まり、残念ながらその夢は夢で終わることになりました。

私はこの春定年を迎えますが、この園で一緒に保育を経験した保育士たちはこの先新しい環境の下で保育に取り組む際にも、ここで得た感動をどこかで生かしてくれるであろうと信じています。残された3年間、小規模園ならではの良さを生かした保育をやりきりながら、新しい園が少しでも子どもにとって良い園となるように準備をすすめてもらいたいと願っています。

鬼遊び（氷鬼）の実践記録

北名古屋市立弥勒寺保育園

犬飼敏江

年長きりん組（男児13名・女児10名）気持ちの優しい子が多く、好奇心旺盛で様々なものに興味を持つが、新しいことに取り組むと不安を感じ自信が持てず消極的になってしまうことが多い。鬼ごっこを発展させていくことにより相手の思いを知り、お互いを認め合い、また、自分のアイデアがみんなに認めもらえることで一人ひとりの自信へとつなげていけるといいと思い取り組んできました。

5月近所の公園へ散歩に行った際、小学生の兄、姉と一緒に遊んでいる子から「氷鬼しよ！」という声で氷鬼がスタートしました。でもまだ氷鬼のルールを知っている子が数名しかおらず、鬼ごっことして成り立たなかったが、ルールを知っている子達が教えていながら氷鬼で遊びました。

園に戻っても戸外の自由遊び中に氷鬼をして遊ぶ姿が見られました。遊びたい仲間が増え次から次へと入って来るようになりました。教える側はその都度教えていかなければならなくなり、教える事の大変さから腹を立てることも多くなり遊びを楽しめなくなってきました。

大好きな氷鬼を楽しめなくなってしまうような子ども達と、氷鬼に興味を持ち始めた子ども達。双方の共通の思いは「氷鬼を楽しみたい！」ということでした。そこで、クラスの活動として取り入れ、鬼ごっこを通して自分の思いを相手に伝え、相手の思いを知り自分の考えを伝えるという話し合いが出来るクラスにしたいと思い、ルールを説明し全体で遊び始めました。

<ある日の様子>

氷鬼は終わりがなく全員捕まるまでいつまでも楽しめる反面、走り続けなければならないことで捕まりそうになると「バリア！」とタイムをかけてしまうので鬼も触ることができず、「つかまえようとするとすぐバリアするからずるい！」と鬼から不満の声が出てきました。

「じゃあどうすればいいと思う？」と保育士が投げかけると、逃げる子から「ここにいるときだけ触っちゃダメ！」と園庭の隅のコンクリートの部分を示しました。

「ここにいる間だけバリアできるんだって。みんなはどう思う？」と聞くと「良いねえ！」「賛成！」と新しいルールが出来上がりました。

初めのルールは「鬼にタッチされたら凍る。」「仲間にタッチされたら溶ける」というものでしたが、子ども達の提案によりバリアゾーンが出来皆がルールを知り、自由遊びでも楽しみ遊び始めました。

10月に入り、運動会を経て、皆で協力し勝敗が決まったり、努力することで成し遂げられる達成感を味わえたりしたことを機会に、中断していた鬼遊びを再開することにしました。子ども達の楽しんでいる氷鬼でも皆で協力し、相談し、工夫することで、ゲームを楽しく進められないか？と再び活動として取り入れていきました。

初めは、鬼になりたい子が少なくいつも決まった子が鬼になっていました。

<10月7日>

鬼として追いかけて捕まえる楽しさ、うまく逃げまわる楽しさ、両方を経験できるよう「鬼をやりたい子が鬼ばかりじゃなくて、鬼を順番にしてみたらどうかなあ？」と提案すると、初めは「え～」と不満の声もありましたが、「1回やってみて考えよう」と、1回やってみてからグループごとに順番で鬼をする事になりました。すると、鬼ごっこをする度に、「今日はどこのグループが鬼？」「どうする？」と考え、鬼として捕まえる楽しさと、逃げる楽しさと両方を楽しめるようになってきました。

<10月13日>

遊びを進めていくうちに、「バリアゾーンは2つがいい！」と2つになりましたが、「バリアゾーンが2つあると、バリアゾーンを行ったり来たりだけするからずるい！」「やっぱり1つ！」と1つのバリアゾーンで楽しみ始めました。中には、「バリアゾーンは無しがいい！」と言う子もいて、「どうしようか？」と話し合うと、「4回戦するから2回ずつ分けたい」という案と、「作っておいて、いらぬ子は使わなければいい！」という案が出てきました。結果、バリアゾーンは作ることに決まりました。

<10月20日> 反省をしてみると

バリアゾーンができると「ずっと入っているからずるい！」と鬼から声が出て、10秒しか入れないことに決まりました。しかし、「誰が数えるの？」「自分で！」と逃げる子らが自分達で10秒数えてから出ることに決まり遊び始めましたが、いつ10秒なのか分からず「触れない！」という声から鬼が数えることに決まりました。

こうして保育士を中心としながら話し合い遊びを進めるなかで、新たなルール作りの意見や、様々なアイデアを持ち発言する子も増え、それを認め取り入れていこうとする姿がクラス全体に見られるようになってきました。

しかし、発言する子も増えそれを聞き受け入れようとする子と、まだ他人事としてとらえている子もいました。そこで、他人事になってしまっている子にも考えて欲しいと思い、発言する機会が増えるよう、5～6人というグループで話し合い相談することを取り入れ、『鬼になったときにどうやったら沢山の子をつかまえられるか？』を話し合っていくことにしました。

最初は、個々が思いつくままに話し、相手の話を聞き、「それいいじゃん！」「じゃあこうしてみよ！」

とお互いの話を聞き、広げていけるようになりました。なかには、「でも～」と否定的な意見もあり、そこで話がストップしてしまうグループもあり、「一度やってみたら？」と保育士が進める場面もありました。また、話し合いの結果「これをやろう」と決めても結局誰もやらなかったりするグループには、「誰か係りを決めてみたら？」と提案していきました。すると、「はさみうちしよ！」「うんそうしよ！」と言っていたのが「はさみうちしよ」「誰が？」というように変化が出てきました。以下は展開の様子です。

子ども達のアイデア

「はさみうちしよ！」「バリアゾーンで10数える人がいる！」「隅に追い詰めて触ろう」「足のはやい子からつかまえる！」「遅い子からつかまえる！」「フープの後ろに隠れている子がいるからそーっ行って触る」等々出てきました。

色々な方法や作戦を経験すると、子ども達の中から不満の声も出てきたので、そこで、それぞれが色々な役割や立場を経験し、みんなが同じ立場にたって、考えられるよう配慮し、話し合っていました。

「えー10数える係はいや！タッチしたい！」と言う子もいました。「どうするといい？」と考え、「じゃあみんなが10数えて、みんなでタッチすればいいじゃん！」と気付いた子がタッチするという方法を取るチームもありました。

途中、「触った」「触ってない」のトラブルもあり、一生懸命逃げていると気付かないのかもと考えて、子どもたちと相談した結果、触ると同時に「タッチ！」と言うことを決め、助けても助けられたことに気付かない子にも「助けた」と声をかけることを決めました。

自分が逃げることに必死で助けることに目が向かなくなった為終了時に逃げ切れた子の紹介を止め、助けることのできた子の紹介に変え、さらに勝敗がわかり喜びや満足感も味わえるようボードを準備しました。このように展開していきながら10月26日(月)年齢別公開保育までできました。あいにくの雨の為、遊戯室で行うこととなりました。

<10月26日> 年齢別公開保育の様子

当番の子がバリアゾーンとなるマットを準備しました。

※2枚のマットの間が開いていたが当番の子が自分たちで置いたことと都合が悪ければ子どもから声が出ると思い、そのままスタート

◎作戦

(鬼：くりグループ)

※久しぶりの遊戯室と鬼のトップバッターに戸惑いを見せるくりグループ。

A：「どうする？」

B：「外じゃないからボールとかもないし…」(戸外では、ボールやフープ置場の後ろに隠れていた。)

全：「…」

保：「ボールとかは無いけど、壁はあるよ」と、室内ならではの壁を提案すると、

C：「そうか！じゃあ、壁に追い詰めるってのはどう？」

D：「わかった！壁の方に追い掛ければいいんだね！」

A：「あと、捕まった子を助けに来た時に『触らないよ』って言って知らんぷりしといて触るのは？」

E：「あっ！騙すんだね！」

A：「そう！！」

B：「じゃあ、きまりでいい？」

全：「いいよ」

と、

- ・壁の方へ追い詰めてから触る
- ・固まっている子を助けに来るとき「触らないから助けていいよ！」と言い、助ける時に触るという作戦に決まりました。

〈終了〉

鬼：「2枚のマットが近すぎてジャンプして渡るから触れない。」

保：「じゃあ、どうしたらいいか離してみて」と、2枚のマットを離す事になりました。

〈作戦結果〉

- ・作戦が仲間と協力するものではなく、個人で行うものであった事と役割として決めなかった事で、一人ひとりが気づいた時に行っていたので、作戦通りに進める事ができたようです。

(鬼：にじグループ)

※毎回二人ずつに分かれ役割分担をしているにじグループ。

F：「今日、G君お休みだからどうする？」

H：「IちゃんとK君が赤いマットで、JちゃんとLちゃんは青いマットで10数えるのは？」

J：「H君はG君お休みだからどうするの？」

H：「一人でいいよ」

J：「一人で追いかける人だね！」

I：「私、K君と10数えるの嫌！走ってタッチする！」

J：「じゃあ、どうする？」

全：「…」

保：「この間IちゃんとJちゃんだったから、いつも同じ子とばかりじゃなくて色んな子と組んでみると楽しいよ。数えるばかりじゃなくてタッチする係と両方やったっていいし」

IちゃんがH君と組む方法もあったが、IちゃんはK君（少々発達がゆっくり）だから…の気持ち大きい様に思ったので、あえてペアを変えない方法を提案した。

H:「じゃあ、走ってタッチする人になってもいいから10数える人にもなって、両方やったら？」

J:「それいいじゃん！」

I:「わかった」

全:「決まったよ！」

- ・バリアゾーンとバリアゾーンの間において移動する子をタッチする
- ・それぞれのマットで10を数える人。

という作戦になり、話はまとまる。

〈終了〉

C:「笛が鳴ったときに触ったからずるい！」

保:「笛が鳴ったときはタッチありにするか？なしにするか？どうする？」

逃げる子:「なし！」

鬼:「あり！」

保:「逃げるときはタッチなしがいいと思うよね。でも鬼になるとありがたいと思うよね？どうする？」

多数決の結果「なし」に決まる。

保:「今日はタッチなしにするけど今度ありもやってみてどっちがいいか決めようね」

〈作戦結果〉

- ・作戦の段階で意見が分かれていた事もあり、なかなか役割分担通りには進まなかったようですが、それぞれが気づいた時に作戦を実行して進めていきました。

(鬼:はなびグループ)

※:逃げる事も2回経験し、要領がわかってきたはなびグループ。

M:「みんなあそこに隠れるから、そこを捕まえにいく。」

N:「だれが？」

M:「Mが」

O:「僕も！」

P:「僕も！」

Q:「僕も！」

N:「みんなじゃん！じゃあ、10数える人は誰がやるの？」

P:「そっか…じゃあ、10数える人でいいよ」

M:「P君いい？」

P:「いいよ」

R:「私も10数える人」

N:「私も」

R:「三人と三人でいいじゃん！」

M:「よし! 決まったよ!」

- ・かくれている子をつかまえに行く
- ・マットで10数える

の、三人ずつに分かれる。

〈終了〉

B:「P君が固まっている子の側にずっといるからダメ! 助けられない!」

P:「ずっとじゃないよ!」

保:「鬼がずっとつかまえた子の側に見張っているのはどうかな?」

子:「ダメー!」

P:「ずっとじゃない!」

保:「ずっとじゃなくて少しの間は?」

H:「ずっとじゃなくて、少しならいいことにする」

保:「もしかしたら、鬼チームもたくさん捕まえる為の作戦かもしれないけど、確かにずっといるとなかなか助けられないから、少しだけならいい事にしようか!」

〈作戦結果〉

- ・遊戯室ならではの隠れ場所に気付いた事で、今までにない作戦がうまれました。それが目新しく、隠れている子をつかまえに行く役割の子は役割分担通りに動いていました。
- ・10を数える役割の子は、役割を忘れがちでしたが時折思い出してはきちんとこなしていました。

(鬼: かぶと虫グループ)

*それぞれの鬼の作戦を聞き、実際逃げ回ってきたかぶと虫グループ。

S:「はさみうちする!」

T:「逆に隠れて、隠れに来た子をタッチするのは?」

全:「ん?」

保:「なるほど! みんながあそこの隅に隠れるから、みんなが隠れる前に隠れて、隠れに来た子をタッチする。って事でしょ。」

T:「そう!」

全:「いいねえ」

U:「あと、タッチしないよ~って騙してタッチするの」

T:「え~なにそれ! いいじゃん!」

S:「決まったよ」

保:「係は決めないの?」

T:「うん。みんなでやるの!」

保:「でも、はさみうちは一人じゃできないよ。」

全:「そっか~」

S :「わかった。はさみうちの時だけ名前を呼ぶ。」

保 :「はさみうちしよう！って思ったらW君はさみうちするよ！っていうの？」

T :「違う！名前だけ！」

保 :「名前だけでわかる？」

T :「わかる！」

保 :「名前を呼ばれたらさみうちの合図だって。大丈夫？」

全 :「大丈夫！」

- ・はさみうち
- ・みんなかくれるから先に鬼がかくれて、かくれに来た子をタッチする
- ・「タッチしないよー」とだまして近寄ってタッチする

という作戦に決まりました。

〈終了〉

前回よりも多くの子が捕まえられた事で鬼は喜び、4チームが終了したことで全員が結果発表を心待ちにしていました。

〈作戦結果〉

- ・4回戦目という事もあり、色々な作戦を聞き作戦も複雑化してきました。その為、なかなか作戦通りに動ける子はいませんでした。
- ・作戦を考える事を楽しみ、それを実行に移す事にはまだまだのようです。

鬼遊びを進めていくうちに作戦も次から次へと新しいアイデアが出るようになり、作戦の幅も広がっていきました。作戦を立てたから必ずそれに従わなきゃ！というのではなく、子ども達も作戦を考える事を楽しみ、また、その作戦が友だちに受け入れられる事に心地良さを感じているようでした。遊び中の問題点もみんなで話し合っていくうちに共通理解を持ち進めていけるようになりました。グループ活動のねらいでもあった、みんなで話し合っ遊びを進めることについては、受け身だった子も話に参加するようになり、自分の意見ばかりだった子は相手の話が聞けるようになり、「これでいい？」とみんなに聞き「こうしたら？」と意見し、お互いを認め話し合いも進めていけるようになりました。押し付けるのではなく5～6人のグループみんなが納得できる方法を見つけようとする姿が見られるようになりました。

今後、逃げる側にも視点を置き、グループで相談した結果を発表していきながら、楽しんでいきたいと思います。そして、発達がゆっくりでうまく遊びを理解していない子に対しても周りでフォローし合える集団を作っていきたいと考えています。

資料

2009年度 事業報告

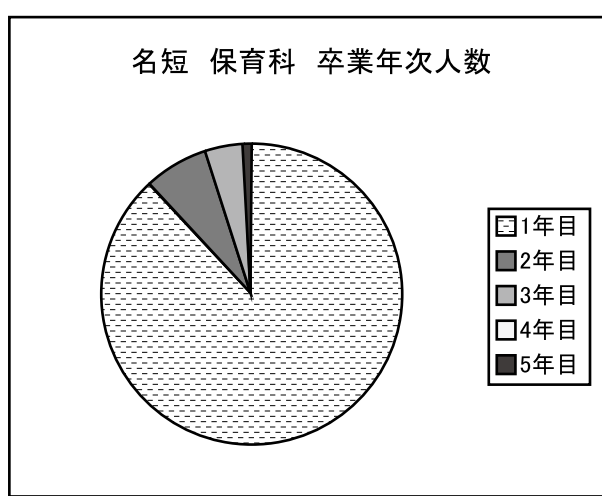
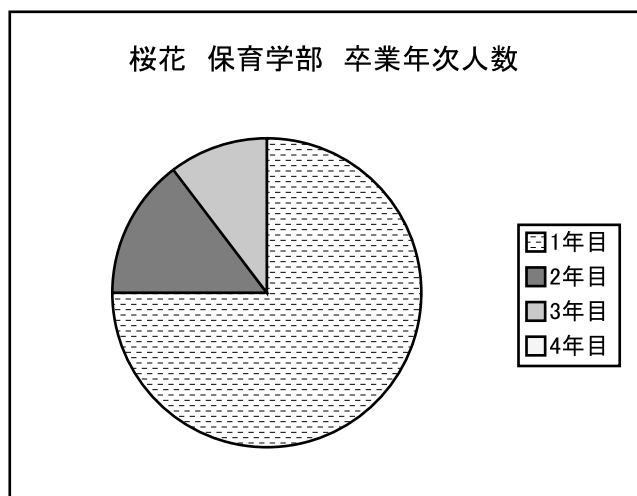
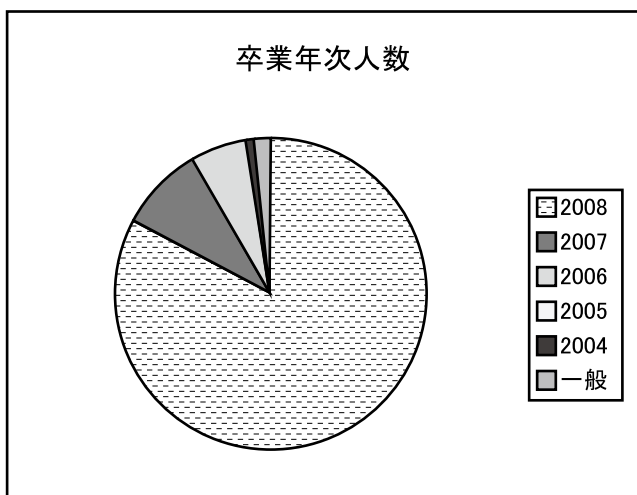
1 子育て交流会

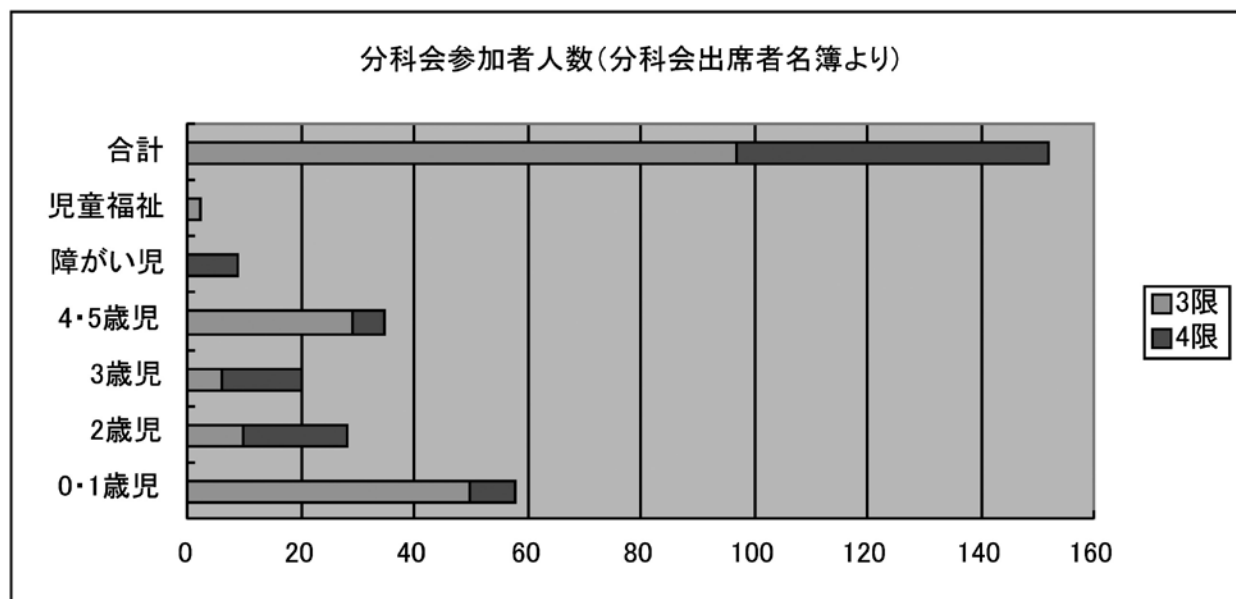
今年度も本学教員、ボランティアのみなさんの協力で子育て交流会を実施しました。詳細は、本号の「保育者養成校での子育て支援—学生参加による子育て交流会—」をご覧ください。

2 第7回夏季保育研究セミナー

2009 保育セミナー集計

参加者人数 169名 (名短118名 桜花48名 他3名)
 (昨年198名 名短128名 桜花70名)





アンケート結果より

卒業した学校・学部・学科

名短	桜花	その他
39	15	0

勤務先

勤務先	公立保育園	私立保育園	公立幼稚園	私立幼稚園	その他
人数	32	11	6	5	0

パネルディスカッション「わたしの経験談・後輩へのメッセージ」

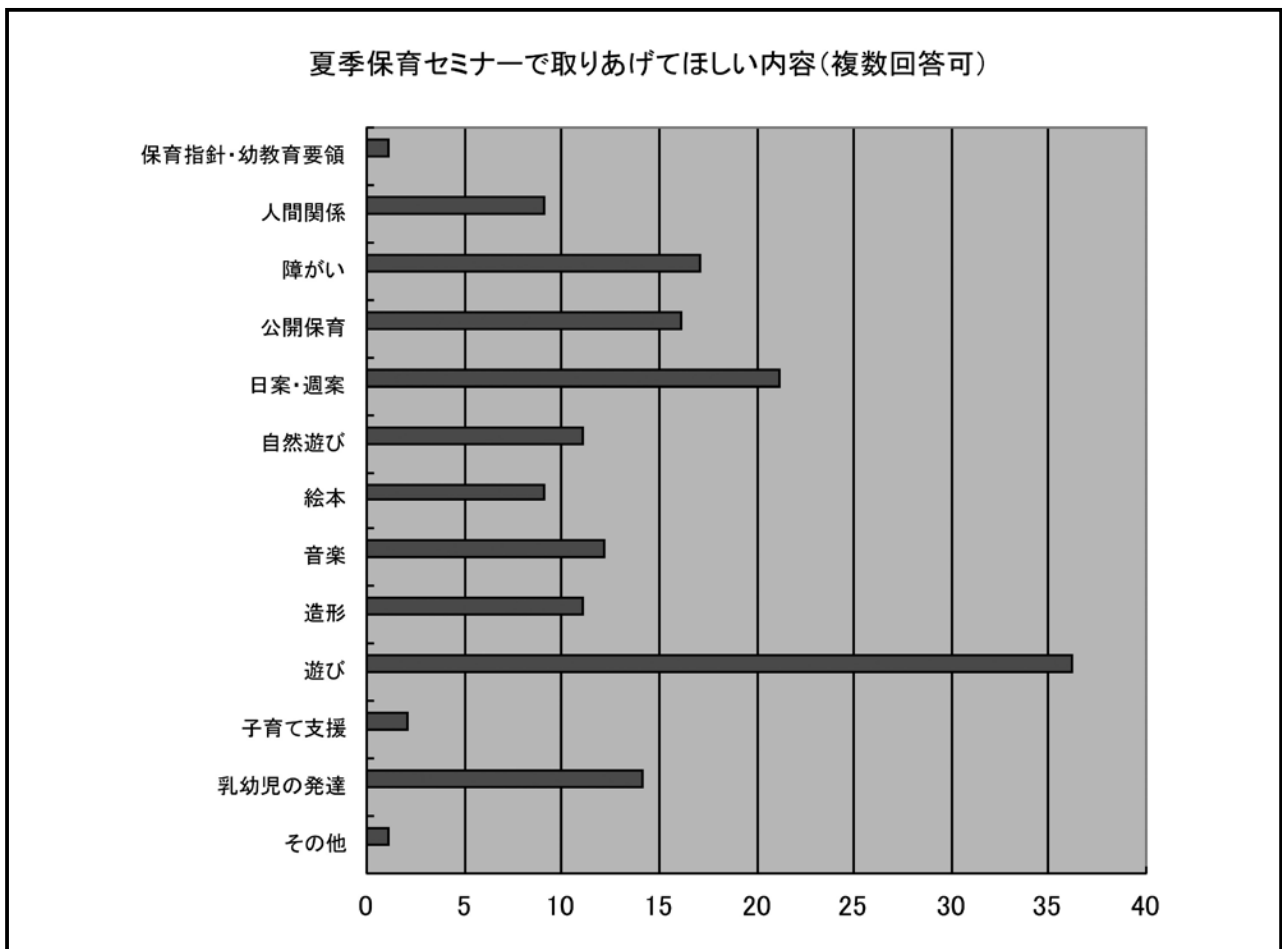
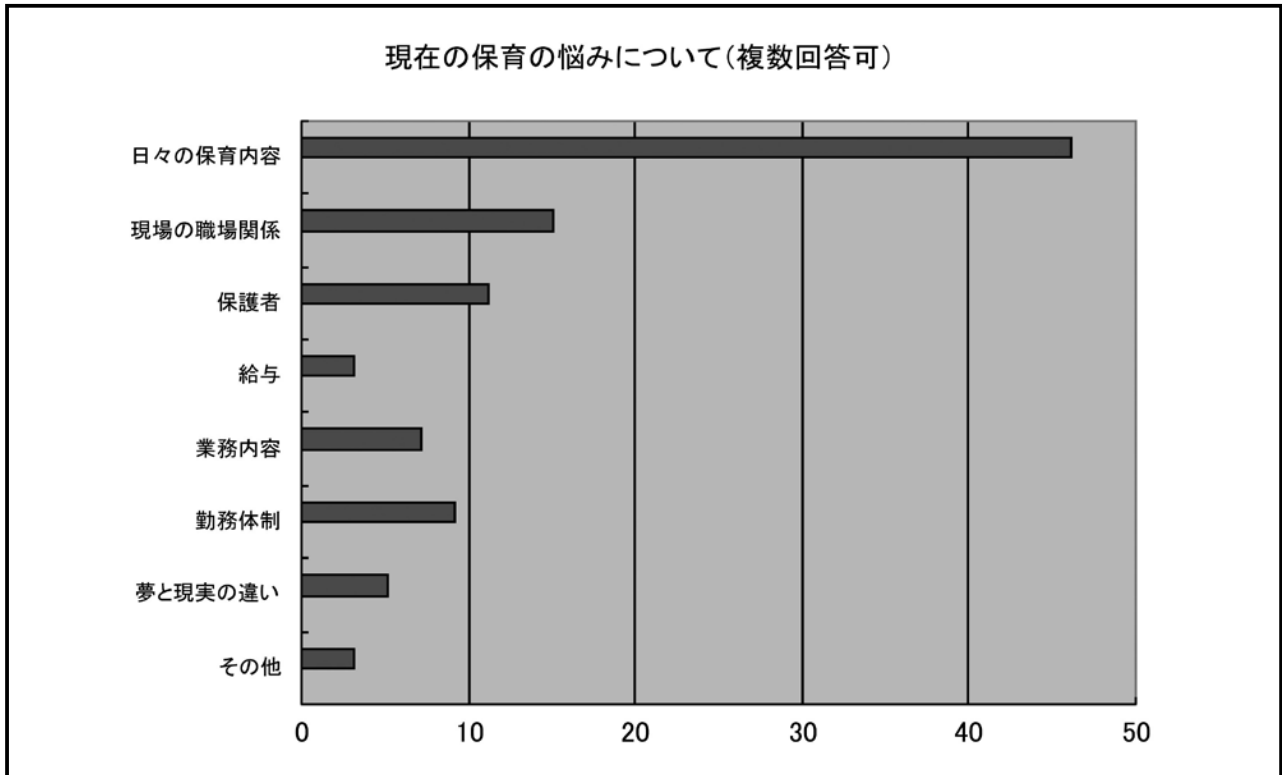
評価	たいへんよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	未記入
人数	28	16	0	0	10

井戸端会議

評価	たいへんよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	未記入
人数	26	15	6	1	6

屋台村・手遊び村

評価	たいへんよかった	よかった	どちらともいえない	よくなかった	未記入
人数	39	13	1	0	1



2009年度の参加者は169名であった。昨年度より15%ほど減少している。午後からの参加者の出欠確認を怠ったことが理由に考えられるが、来年度もたくさんの参加者の呼びかけをしたい。また、今年度の特徴として過年度卒業生の参加が増加している。卒業生の交流を深めるためにも、より充実したセミナーとした上で、今後、参加者の層を増やしたい。

アンケート結果については、回収率が悪かった。次年度より提出の呼びかけを強化したい。

パネルディスカッションについては、「勇気をもらった」「元気をもらった」という前向きな姿勢になることができたという意見、また「安心した」「心が軽くなった」という安堵感を感じたという意見が多かった。

分科会については、先輩保育者からより実践的な話を聞き、具体的な解決策が得られたという意見があった。また分科会参加者の人数について、ばらつきがあるので、調整の必要があると感じた。

屋台村・手遊び村については、明日から実践できる製作ということで好評であった。今年度より手遊び村を新設したが、人気のある手遊びの情報交換の場として特に好評であった。

また、来年度のセミナーの参考にしたいと考え、現在の保育の悩み・夏季保育研究セミナーで取り上げてほしい内容について、アンケートを行った。現在の保育の悩みについては、「日々の保育内容について」の項目が突出しており、より実践的な内容が必要であると考えられる。また、夏季保育研究セミナーで取り上げてほしい内容についても、「遊び」の項目が突出しており、今後、ワークショップを踏まえた内容や、情報交換の場が必要であると考えられる。

本年度は、志向を変えて、より実践的で、日頃の保育の心理的な軽減を行うことを目標とした。来年度も、より多くの卒業生の参加を求め、今後の保育の糧となるセミナーにしたい。(田端 智美)

3 公開講座・シンポジウム

今年度は、立教大学コミュニティ福祉学部教授の浅井春夫先生を迎えて開催されました。詳細は、今号の特集をご覧ください。

2009年度保育子育て研究所役員体制

所長	宍戸 洋子	(保育科)
副所長	田中 義和	(保育学部)
主任研究員	田端 智美	(保育学部)
主任研究員	吉見 昌弘	(保育科)
事務職員	馬場 美津子	(庶務会計課兼)

保育子育て研究所年報第7号 執筆者

大谷 岳 名古屋短期大学 学長
石黒 宣俊 桜花学園大学 学長
浅井 春夫 立教大学コミュニティ福祉学部 教授
高柳 鈴子 桜花学園大学保育学部 教授
原田 明美 名古屋短期大学保育科 准教授
荒川 良子 名古屋短期大学 非常勤講師
基村 昌代 桜花学園大学保育学部 准教授
穴戸 洋子 名古屋短期大学保育科 教授
高須 裕美 名古屋短期大学保育科 講師
田中 義和 桜花学園大学保育学部 教授
高田 吉朗 名古屋短期大学保育科 教授
吉見 昌弘 名古屋短期大学保育科 教授
杉野 葉子 阿久比町立城山保育園 園長
犬飼 敏江 北名古屋市立弥勒寺保育園 保育士
田端 智美 桜花学園大学保育学部 助教

(掲載順)

保育子育て研究所年報 第7号(2009年度)

発行者 桜花学園大学 名古屋短期大学
保育子育て研究所
発行年月日 2010年3月31日
住所 〒470-1193
愛知県豊明市栄町武侍48
桜花学園大学 名古屋短期大学内
電話 0562-97-1306
FAX 0562-98-1162
HP [http://www.hoiku.ohkagakuen-u.ac.jp/
koso/home.html](http://www.hoiku.ohkagakuen-u.ac.jp/koso/home.html)
印刷 (株) シイエム・シイ

桜花学園名古屋キャンパス
保育子育て研究所

